

楽 園 の 暇

- E d e n ' s C a g e -

Attention

R-18

オメガバース設定

暴力・殺人の描写を含みます

目
次

In the Cherry blossoms	12
Rain of Autumn leaves	30
One side of Sunflowers	42
Cage	56
Nest	92
Above the Aurora	112
At that time	124
Paradise Lost	128
Noah falls	158
Planet of Rain	186
あとがき	218

The first pigeon came back to the ark.

The second pigeon came back with an olive leaf in its beak.

The third pigeon finally didn't come back.

Genesis book 8 : 6-12

[Adam]

闇の中。グリーンに発光する無数のメーター。大小さまざまな機械類が壁に沿って並んでおり、各種のボタンやレバーはそれ自体が意思を持っているかのように動作している。

その部屋を中心。低い台座の上にある、球体の巨大な水槽。上部のパイプがいくつも天井に伸びている。人影がある。界塚伊奈帆。彼は台座に顔を向け、真っ直ぐに立っていた。

「人類のため？」

伊奈帆の声。呟きほどのその声は、夜更けの雪のように、静かに堆積する機械のノイズ音に溶け入る。

「違うんだ」

グリーンランプ。レバー。ボタン。ノイズ音。それらはまるで目と、手と、囁い声と、そして呼吸。内側に向け開かれた機械の体内。人類の叡智を結集し、人類のために作ら

れた「ノア」の胎内。

運命の席を、蹴ったはずだった。

「僕が望んだから」

そこに、座らせた。本人の意思とは関係なく。蹴った席に必死で戻り、逃げた運命に殉じる。後悔は嫌いだ。だからこれまで、後悔の無い選択をしてきた。以前の自分なら、考えられない行動。

絶対に後悔する。それでも、これしか選べなかった。

「……君は死んだ」

僕を残して。

「僕も、いなくなる」

君を残して。

「その繰り返しだ」

その連鎖。

「許してほしいとは言わない」

手が伸びる。指先が撫でる球体の青白い発光が、手の輪郭を淡く染める。その先にあ

る、秋の終わりの落葉樹の、梢に残る一葉のような存在に。

液体で満ちた球体水槽の下部から泡が生ずる。それは上昇を伴い結合し、大きく膨れパチンと弾ける。その繰り返しに伊奈帆はじっと目を凝らす。

立ち昇る泡の連なりは暗示なのかもしれない。果てのない不幸の連鎖の。

「ただ、僕は」

ガラスを引く掻く耳障りな音が反響する。握った拳を引き寄せる。

その手の中には何もない。

今は。

僕は。

離してしまった。知っていたはずだったのに、思い知った。本当に手を握ったのなん

てあの時だけだ。骨張った肉の薄い手は、僕の手を強く握り返していた。

他には何も、誰もいらぬ。世界に居場所が無くてもいい。倒れそうになったら握った手を引き合いながら、互いの背中を交互に見て。ただ、二人で。

そんな風に、僕らは生きていたかった。

「ただ、君に会いたい」

君の手はもう、ここにはない。
けれど。

「君の思い出に、会いたいんだ」

伊奈帆は手を握る。最後の時に握った形で。

乾いた、熱い手のひらだった。

「君の、未来の思い出に」

開く右手。その手の中の、見えない手を解くように。青く光る水の中、パチン、パチンと泡が弾ける。

あなたたちは産めよ、
増えよ。
地に群がり、
地に増えよ。

創世記

9
..
15
・
16

In the Cherry blossoms

キュ、とネクタイを結ぶ。左右対称のプレーン・ノット。

「もう少し、右かな」

ビデオの通りにやったけれど、本当にこれでいいのだろうか、と界塚伊奈帆は洗面所の鏡に映る自身の姿を、いくつかの角度で確認する。初めて結んだネクタイ。特に変なところは見当たらない……ように見えるが、比較対象がいないので、なんとも言えない。

「ま、いいか」

ローファアを履く。こんな靴は初めてで少し硬く窮屈だが、ぴったりだ。扉を開く直前に、振り返り自分の部屋を見渡した。

パーテーションで区切られた奥の寝室にはベッドとクローゼット。正面には収納テーブルセットと簡易キッチンがあり、向かって左が洗面所とバス・トイレ。反対側の壁面では八〇インチモニタが、時刻とマップを表示している。

「あ」

伊奈帆は履いた靴を脱ぎ、クローゼットへ駆け寄った。持ち上げたのは紺色の学生靴。荷物を忘れるところだった。それにしても。

こんな重いのも、本当に必要か？ 中身はタブレット端末だけなのに、と思いつつ、持ち手を腕に通して背中に背負う。

「これでいいかな」

靴を履きなおし、扉のロックを解除する。足を踏み出す前に、伊奈帆の脳裏にテキストの一面面が浮かんだ。確か、こういう時は決まり文句があつたはず。

「イッテキマス」

言った後で、なんとなく気恥ずかしくなり伊奈帆は口を引き結ぶ。

足を踏み出す。扉の外に見えるのは、ハルの風景。

シガツ。

コウコウセイ。

ニユウガクシキ。

薄紅の切片がひらひらと舞い落ちる。あれは。

「あ、サクラだ」

ドアが閉じる。伊奈帆はバッグを背負い、案内表示に従って、初めてエキへと向かう。初めてのネクタイ。初めての制服。初めての、学校。

初めて、自室の外に出る。

学校か。一体、どんなところだろう。

伊奈帆は桜を見上げ、口を結ぶ。

どんな人だろう。

“運命の番”は。

一月十一日生まれ。血液型はA型。数学と化学、言語学がよくできる。入学は十三カ月前。センパイだ。身長一七〇cmで、容姿の特徴は色素の薄い肌と金髪。

「見ればわかるって話だけど」

教育ビデオのインストラクターに文句を言いたくなってくる。見ればわかるって、番なら当たり前じゃないか。問題は、見た後なんだ。

上手く喋れるかな。

何が好きかな。

僕を好きになっってくれるかな。

「……僕の番を」

僕は、好きになれるかな。

「四千五百五十六」

伊奈帆は歩数を呟く。駅は、想像よりも遠かった。しかし、春の風景は、色も匂いも思っていたよりいい感じた。新しいことを始めるには、うってつけの季節だろう。

駅の改札口でカードをパネルにタッチする。パカッとすんなりゲートが開く。アトラクションみたいで面白い。しかし、手間にかかる面倒臭いシステムだな、という感想を抱く。

「新葦原行きは、二番ホーム」

電光掲示板で確認。ホームへ向かう階段を登る。三十八段。時間と労力の無駄を大いに感じる。このツウガクロも、そのうち慣れるだろうか。

「……あ」

プラットホームに、人がいた。

桜が舞い散る只中に、それを見上げる制服を着た横顔がある。自分とは異なる色の髪が首の動きで左に靡き、桜の花が毛先を撫でた。風を感じる。光度が増す。それは錯覚にすぎないと知っているのに、眩しさを感じ伊奈帆は両の目を細める。

ああ、わかる。わかった。この人だ。

「カイヅカ、イナホ？」

伊奈帆は頷く。心臓が、爆発しそうにドキドキしてる。

聞いた通りの色素の薄い髪と肌。こちらに気づき、見つめる瞳の色は碧。整った目鼻立ちとシャープな輪郭線。同じ形に結ばれた臍脂のネクタイ。真っ白なワイシャツ。襟元に覗くのは、皮膚を模したセラミックのプロテクションカラー。

「スレイン・トロイヤード？」

彼も頷く。鋭い造形の目元が柔らかく弧を描き、眉尻が下がった人好きのする微笑みが浮かぶ。伊奈帆はふう、と息を吐き出す。柄にもなく、緊張していたらしい。

スレインは伊奈帆に歩み寄り、右手をすつと差し出した。

「入学おめでとう。伊奈帆。今日からよろしくお願いします」

その右手を右手で握る。人の手だ。温かい。不思議な感触。

「こちらこそ、よろしく」

僕の「オメガ」は、この人なんだ。

心のどこかでこの日をずっと待ち焦がれていたはずなのに。いざ当人を前にすると、なんだかひどく落ち着かない。伊奈帆は目のやり場に迷い、ホームに面した桜並木を横目で見る。百六十二。ひらひらと落ちる花びらの枚数を無意識に数えてしまう。

「ふふっ」

スレインの笑い声。視線を戻すと、上目遣いの笑顔があつた。

「何？」

ばつが悪くて慚然とした声と表情になつてしまつたが、スレインは気にした風もなく肩を上下に軽く動かす。

「いえ。思つた通りの人で良かったな、って」

どきりとする。次の瞬間、じんわりと活力が広がつた。

そっか。僕、嬉しいんだ。

「僕も、そう」

スレインの言う「思つた通り」がどのへんなのかはわからないけれど、期待外れでは

無かった、という点では同じだ。

「優しそうな人で良かった」

素直に言葉にできた自分が新しい。

「そうですか？」

スレインがくすぐったそうに言う。

「うん」

階段を上りきったところで見た、光の中の彼の姿が鮮明に思い起こされる。桜を眺める横顔の、角度も頬の曲線も。綺麗な人だ、という途方もない衝撃。それは思った以上のことだった。

でもそれは、さっきと違い、口から出てはこなかった。

「学校って、どう行くの？」

代わりに出てきたのは、音声にする必要の全くない些末事。それは彼にもわかっただろうが。

「もうすぐ、電車が来ますよ。見るの、はじめて？」

優しい言葉にほっとする。ガタンゴトンという音が次第に大きく聞こえる。

「乗るものをはじめて」

両開きにドアが開き、昇降口をローファーが踏む。

「ここが、僕らの教室です」

立方体の内部には、出入り口と窓と全面モニター。テーブルセットが並んで二つ。壁も床も天井も、配置された備品も白を基調としているが、木製の素材を使っているせいで無機質な感じはあまりしない。

机の一つにスレインが近寄ったから、伊奈帆は残った方に鞆を置く。

「時間割は確認してきましたか？」

スレインの言葉に伊奈帆はこくりと頷く。

「うん。ピンとこないけど」

カリキュラム通りに選択してきた。その場ですればいいのに、時間指定があったから。

「形から入るのも、大切なんですよ」

「形から？」

「ゴウニイッテハゴウニシタガエ」

「なにそれ」

「あれ、知りません？」

トウヨウのコトワザですよ、とスレインは付け加えるが、わからない。それと僕とに何の関係があるのだろうか。

伊奈帆が考えていると、スレインが困り笑顔で肩を竦めた。

「とにかく、言われたとおりにしてみる事です」

「そうだね」

席につくと、光学パネルが出現し、最初の科目のビデオが喋り出した。

「ここが、学食です」

食事に案内された部屋に足を踏み入れ、伊奈帆はびたりと立ち止まる。

「ガクシヨク」

「学生食堂の略語ですね。どうですか？」

初めて見るものが色々あった。テーブルセットが二十一組。一面に展開するオープンな提供場所。模様の複雑な暖色の壁と、正方形を敷き詰めた床。観葉植物まである。装飾過多で落ち着かない。

「無駄が多いね」

スレインが苦笑いする。彼も初めて見た時に、同じ感想を抱いたのだろう。

「ですね。でも、悪くないでしょう？」

「そうかもね」

まずABCからメニューを選択。床に示された順路に従い、二人は並んで移動する。

「そこで、立ち止まってください」

「ここ？」

「食券を提示して」

「Aランチ」

ガコン。

プレートのAランチが提供され、伊奈帆はそれを手に取った。

「へえ」

「飲み物はあっちです」

スレインに先導され、順路の先のサーバーへ向かう。

「これは、こうするんですよ」

スレインが並んだボタンの一つを押すと、カップに入ったホットティーが奥から出てきた。

「クラシカルだね」

「珍しいでしょう？」

「そうだね」

伊奈帆も做ってボタンを押す。アイスティーが提供された。

観葉植物の近くのテーブルを選び、二人は向かい合って座る。トレイの蓋を開ける。

「あれっ」

トレイの上部にスプーン。その下がミール。スタンダードな食事の形式。普段の食事と変わらない。しかし、自室で食べるものとは違い、スペースが一つではなく縦四つに仕切られていて、それぞれの色や形に違いがある。

「変わってるね」

「見た目重視なんです」

「へえ」

食事にそういう判断をしたことがないので、スレインの言葉は新鮮だった。

伊奈帆はスプーンを手に取り、右から順に一口ずつ試してみる。赤いのは酸味が強く、緑はねっとりしていて苦味がある。黄色はもそもそした食感で、咀嚼しているうちに甘味が出てくる。白色はいつもの食事の味だった。

「固形物の硬度が違うよ。味の変化は興味深いけれど、これじゃ効率が悪い」
スレインがスプーンを持ったままにこりと笑う。

「これには、ねらいがあるんですよ」
ねらい？ この非効率な食事に？

「どんな？」

スレインが臉の内側に沿って瞳をぐるりと巡らせた。

「ゆっくり食べるように」

「どうして？」

「それは、ほら」

人差し指が宙に八の字を描く。

「僕と一緒に、楽しく食べるためでしょう？」
なるほど。

「……そっか」

要するに、これも授業の一環だと思えばいい。

「ふふっ」

「どうして笑うの？」

「いえ、素直な人だなあと感心して」

そんなの初めて言われた。一般的には誉め言葉なのかもしれないが、嬉しくない。

「僕、馬鹿にされてる？」

「そんなことないですよ。かわいいところがあるなと思って」

そんなのも、初めて言われた。それにしても、誉め言葉としては、使う場合と相手が相応しくない。

「やっぱり、馬鹿にしてる」

「とんでもない。……ふふっ」

完全にかかわれている。悪気はないかもしれないが、いや、ないから一層たちが悪い。

「もう。怒るよ」

むっとした表情を作りそう言うと、スレインはぱちりと瞬き小首を傾げる。

「伊奈帆って、怒ったらどうなるんです？」

そうきたか。

「……怒ったことないから、わかんないけど」

想像する。怒ったら、僕はどうなるのだろう。

「多分、すごく喋ると思う」

スレインが、うへえ、と言いつつ顔で口を曲げた。

「うわあ……。笑ってゴメンナサイ」

「それは、僕の話聞いたくないって意思表示？」

「ええと……。まあ、そうです」

素直すぎないか、と伊奈帆は呆れる。素直にも、いいと悪いとがある。

「ちょっとスレイン。お喋りしながら仲良く食べるんじゃないの？」

伊奈帆が詰め寄ると、スレインは困り眉でへらつと笑う。

「だって、伊奈帆の話は面倒くさそう」

話が長そう。細かいことをしつこく言いそう。情緒が無さそう。……出会ったばかりで、散々な言われようだ。

「そんなことない。リクエストがあるなら聞くよ」

それでも、知識は広い方だ。深度には、分野によって差があるが。

「リクエストですか？ うーん」

スレインはスプーンを指でくるくる回し、斜め上の方を見た。マナーがいいとは言えないが、第一印象より気さくで、ずつとつつきやすい。

「きれいな話がいいな」

きれいな話？ と伊奈帆は心の中で鸚鵡返しする。話に綺麗も汚いもない……と言った言い過ぎだけれど、知識に関して初めて試みる判断基準だ。キレイ。きれいか。そんな話題、持ち合わせていたかな。

スレインがスプーンを三度口に運んだ。これかな、と思うものをようやく見つける。

「じゃあ今日は、Cビームについて話そうかな」

スレインが目と口をぱっと開いた。前歯が見えてほっとする。

「あ、いいですね。そういうの好きです」

「そう？」

じゃあまずは、タンホイザー・ゲートとは、と話し出すと、スレインの眉の角度がハの字になった。

「なんか、変な感じ」

昇降口で伊奈帆が呟く。スレインがくすりと笑って頷いた。

「そうですね。僕も最初、そう思いました」

学校って、不思議だ。わざわざ家を出て、歩いて、電車に乗って移動して、モニターを見て、自室と同じ当たり障りのない勉強をするだけ。時間とエネルギーの無駄としか思えない。だって、僕らが学校に通う目的は勉強じゃない。

“レンアイ”に、こんな効果があるのだろうか。

「すぐ慣れますよ」

帰りの電車で、スレインが言った。窓の外には桜の花が散っていた。

Rain of Autumn leaves

贅沢な空間だ。シューズの底に木製床が高い音で擦れる。高い天井には波型の反響版があり、そこらも木でできていた。入学から一ヶ月の今日、初めてタブレットに表示されたカリキュラム。

音楽。

黒色に光るグランドピアノの前に、伊奈帆は一度立ち止まる。緊張しているみたいだ。電子楽器を教育ビデオで習ったけれど、練習通りにできるだろうか。

伊奈帆は天板を開き、椅子を引き寄せ鍵盤に指を置く。指の重さを精微に受け止める造り。リアルだ、と自然に口角が上がる。指弾に指の背を滑らせる。次は指の腹。滑らかで芯がある。いい感じた。

鍵盤から視線を外し、少し離れた長椅子へ送る。スレインが真面目な顔でこちらを見ている。

人に聞かせるのは初めてだ。上手く弾けばいいけれど。

定められた音階に、吸いつくように指が走る。飛ぶ。跳ねる。指と手首の軽さに驚く。ねらった以上に正確なタッチが引き出され、余韻が伸びやかに広がってゆく。

すごいな、これ。ちゃんと“本物”だ。

音が空気を伝っていく。トリル。トレモロ。グリッサンド。時間差で発する音は点から線に。粒が流れに。旋律となり形を成さずに消えていく。見えなくてもあるもの。それでも、すぐに消えるもの。不思議だな、と素直に思う。こんな物理現象に、楽しみを見出すということは。

あつという間にスコアの端だ。音が消えると、短い間隔の拍手が起こった。

「すごい。上手ですね」

伊奈帆の位置から数メートル先の長椅子で、スレインがにこやかに笑う。こういうのには慣れていない。どう答えていいのかわからなくて、伊奈帆はペダルに目を落とす。

「……僕はこれが、向いてただけ」

スコアの通りに弾いただけ、と付け加える。一人で訓練していた時には、何の感情も抱かなかった。こんな行為に、意味はあるのか。演奏に集中するほどそう考えずにいられない。与えられた“意味はある。しかしそれは、説得力に欠けると伊奈帆は今まで

考えていた。教育ビデオの“心を通じ合わせる”なんて、馬鹿馬鹿しいと思っていた。無駄なカリキュラムだが、僕は無駄は嫌いじゃない。だから、抵抗もなく続けてきたけれど。

「君は、どれ？」

でも、スレインの顔を見ると、ちゃんと弾けるようになっておいて良かったな、と思う。自分の変化に少し驚く。

「僕は、こっちの方が性に合います」

彼の手元にはヴァイオリン。意外だな、と思う反面、よく似合う、とも同時に思う。構えた姿勢が整っていて、弓を持つ指の形が美しい。

撥弦楽器の摩擦音が、木製のボディに共鳴する。音が違う。これも、ちゃんと本物っぽい。調律を兼ねた試奏の段階で、相当上手いな、と感じた。

「合わせてみようよ。好きな曲は？」

「古い曲でもいいのなら」

ブラームス作曲ヴァイオリンソナタ第一番ト長調作品78。確かに古いが、構いやしない。伊奈帆の頬に笑みが浮かぶ。

「ブラームス、僕も好きだよ」

それなら、完璧に弾ける。

スレインが不安げな表情でペグをいじる。

「どうしたの？」

「初めてで、上手くいくかな」

「何回だって、やればいいじゃない」

伊奈帆が言くと、スレインは頬を綻ばせた。

「それもそうですね」

タブレットに譜面を出す。全部やると通すだけで約三〇分。今日の最終科目だから、長引いてもかまわないか？

「第一楽章から？」

スレインも同じことを思ったのだろう。スコアとにらめっこしつつ首を振る。

「いえ。今日は三だけで」

伊奈帆は譜面をそこまで飛ばす。メロディーが思い出され、指が上がった。

「僕も、そこが好きだよ」

目が合って、笑みの形に瞼が細く丸くなる。しん、と音がすべて消え、弓の震えを耳が見て、指の先が音を予見し呼応する。

最終下校のチャイムが騒々しく割り込んだ。我に返って時刻を見ると、セッション開始から九十五分が経過していた。

「いつの間に」

見ると、スレインも目を丸くしてタブレットに顔を近づけている。

「ごめん。楽しくて、夢中になった」

伊奈帆が立ち上がり言々と、スレインは笑顔で頷く。

「お互い様です」

第三楽章だけを何度も繰り返し、気づけば時を忘れていた。言葉ではないやり取りは、没入感が大きいのもかもしれない。同じ楽譜で、アレンジもしていないのに、毎回発見がある。

天板を下ろしつつ伊奈帆は、それは、相手がスレインだからだな、と思った。向こう

の音がよくわかるし、音に求める解釈がそっくり同じに似ているようで全く違う。こういうのをなんて言ったつけ。『オナジコインノオモテウラ』だったか。

スレインが片付けるのを待つ間、窓が視界に入って伊奈帆はあれ？と思う。窓枠に近づきカーテンを寄せよく見ると、赤い葉っぱと黄色い葉っぱが空気抵抗を受け、揺らぎながら落下している。名前は確か、モミジとイチヨウ。

「桜の次はモモジとイチヨウ。秋っていうのは、あわてんぼうだね」

伊奈帆が窓際で軽口をたたくと、スレインが近づいて来た。窓に彼の指が触れる。冷たそうな指先に見えた。

「どうして、葉っぱが落ちるんでしょう」

「冬をやり過ぎたためでしょ。水分不足で木が枯れないように、葉を落とすんだよ」

即答すると、スレインは小さく首を振った。答え方を間違えたらしい。

「落ちた葉は、どこにいくのでしょうか？」

「それは……」

分解される、と答えるのはやめておく。もっと本質的な何かを聞いている気がした。

「……不思議だね」

でも考えても、そのくらいしか僕は言葉を持っていない。スレインは僕を見る。無表情に近い整った顔立ちは、綺麗すぎて怖いくらいだ。

「花が散る。葉が落ちる。木が枯れる。……それって、本当ですか？」

スレインの指の先の窓を見る。赤い紅葉。黄色い銀杏。木から離れて、地面に落ちて。そのあと。

「僕には、わからない」

情けないが、そんなことしか僕には言えない。さっきまで、通じ合って、何もかもを分かり合った気がしていたのに。

言葉って、どうしてこんなに不自由なんだろう。

「すみません。困らせたいわけじゃないんです」

スレインは窓に接した手を握る。見えない地面を見つめるように項垂れて。

「僕は少し。……落ちる木の葉がうらやましい」

思わず、その手首を僕は握った。

「スレイン」

つかまえていないと、一葉になって散ってしまうような気がした。もう二度と会えな

くなって、さっきみたいな演奏も、話も、できなくなってしまいう気がして。

「……伊奈帆？」

握った手首を、離すことができないまま。

僕は、言葉を見つけれなくて。

ああ、どうして言葉は、こんなに歪なんだろう。

伝えたいことが確かにあるのに。できたのに。

どうすればいいのか、わからない。

「……伊奈帆」

握る手を、スレインがもう一方の手で包む。体温を感じて、僕はなんだか泣きたい気持ちになつてくる。

言葉の代わりに。音の代わりに。

頬に触れる。青い静脈の透ける白い頬。睫毛の影が落ちる目の端を指で拭う。瞳は乾いて、泣いてなんかいないのに。

瞼がゆっくりと閉じて、瞳の色が見えなくなる。

僕も瞼を閉じる。

唇が重なり、歯がぶつかる。舌が互いの位置を探して絡み合う。触れた頬より、掴む手よりも、口の中はずっと熱い。

「……んっ、う」

仰け反る頭を、頬に触れていた手で支える。細い猫毛が指の間をさらさら流れ、そのまま僕の手はうなじを求めて首に触れる。

セラミックの感触。うなじを覆うオメガのプロテクションカラー。

わかっていたはずなのに、ショックを受ける。思い知る。自分とは、別の種の、別の個体であることに。口づけは更に深くなる。唾液を飲み込み、歯列をなぞり、口蓋を擦る。掴み合った手が強張り、手の甲に彼の爪が食い込む。重なる胸に鼓動が響き、互い違いの足が纏れる。

「……ふ、……っ」

よろけたスレインの背中が壁にぶつかった。薄く瞼を開くと、カーテンの影にいた。顔を離して瞼を開ける。熱っぽい目。潤んだ目尻を指で拭う。

ネクタイに指を掛ける。シュル、と音を立てて結び目はほどけた。互いの呼吸を頬に受け、僕はスレインのシャツのボタンを両手で外していく。解放されたスレインの手は、

僕の髪を両手でゆっくり撫でていた。

「……あ」

胸に触れる指が止まる。指に感じる、傷一つない滑らかな素肌の触りに、言いようのない違和感がある。

「……っ」

僕の髪を梳くスレインの手もぴたりと止まった。左側頭部の耳の上部を、指が何度も往復する。

——あるはずのものがない。

「スレイン……」

スレインは茫然と僕を見つめた。僕も同じような顔をしているに違いない。

何だろう。この感じは。不安？ 畏れ？ いや、違う。

見開かれた碧の瞳に水滴が溢れ、頬を幾筋も流れ落ちる。僕は思わず、受けとめようと彼の胸から手を離れた。支えを失い、スレインは膝から床に崩れ落ちた。

僕はしゃがんで、その背に手のひらを乗せる。小刻みに震える熱い背は汗が滲んできていた。

「ごめん……、な、さい、どうして……」

床に水滴が落ちる。カーテンの影が揺れている。僕は、彼の背に触れる自分の手を見てぞっとする。

さっき、触れなかったもの。

僕はそれを、どこで知った？

彼の背をさする右手の甲。反対側。手首の内側。その意味を、僕は生まれて初めて考える。

「……て、……ろう」

嗚咽の間の弦きが聞こえた。聞こえてしまった。——どこで、なくしてしまったんだろう。

僕も同じだ。

何を無くしたのかさえ、わからないのに。

喪失の痕だけが残っている。

涙を拭うスレインの、右手首の内側に気付く。

— … —
18 —

18
, 7
|| 11

意味のない計算の後、自分の手を見てほつとする。
それ、君にもあるんだな、つて。

One side of Sunflowers

ヒマワリだ、と向こう側の車窓を眺める。

「不思議だなあ」

自分の言葉に、伊奈帆はぱちりと瞬いた。誰かといるときに考えが声に出るなんて。リラックスしている証拠だ。

「どうかしましたか？ 伊奈帆」

隣に顔を向ける。座席の長い空白に長方形の光が差し込む。

「向日葵。夏は、おっとりしているなあって」

「あははっ。確かに」

スレインが明るい表情で笑ってくれてほっとする。映画の帰り道。僕らは電車の中から窓を見ていた。2Dの画面に映し出される映像を、狭い座席で並んで見る。貴重な体験だ。お互いに制服ではない姿を見るのも新鮮だった。スレインの私服は、七分袖のブルーのトップスと黒のチノパン。思っていたよりラフでシンプル。僕も似たような感じ

で、羽織り物が一枚多い。二人並ぶと、それなりにバランスのとれたファッションだったんじゃないかと思う。

見終わった内容を脳内で反芻する。題名にあった二〇〇一って、どこから出てきた数字だろう。百四十二分間の歴史物。工作みたいな宇宙船のセットやシステムに造り手のこだわりを感じ興味深かったが、作中の食事は僕たちのものとそう変わらず、作り込みが甘く感じて少し残念だった。

「映画って初めて見たよ」

ああいうフィクションはコンパートメントでは見られないものだから、最後まで集中して観てしまった。慣れない環境と疲労で首の後ろが少し重い。

「僕は、十五回目くらいです」

スレインが意外な返答をした。

「え、そんなに？ 毎日学校で会うのに」

こんな面白いことにどうして誘ってくれないの、と言いそうになって口を噤む。そんな個人の自由だろう。

「伊奈帆と会おう前のことですよ」

スレインはあっけらかんとそう言った。彼の言葉にほっとする。

「そんな時から、マップが解放されていたんだ」

「年上ですから」

「一歳だけでしょ」

「年上は年上です。この事実が変わりません」

顔を見合わせ、同時に吹き出す。僕は自分が、こんな軽口を叩けるなんて知らなかった。

「君に会う前は、どこかへ行きたいなんて、考えたことも無かった」

「へえ」

応えるスレインの声は優しい。

「毎日同じことの繰り返しで。そのことに、何の疑問もなかったんだ」

「そうなんですネ」

それしか知らなかったから、と今となってはわかる。最初は面倒くさいと思っていた学校も、慣れてしまえばそれ以外の一人の時間が退屈で仕方がない。

ガタン、と電車が不規則に揺れる。通学よりもゆるやかに。

「僕は、君といると楽しいよ」

「何です？ 急に」

「思ったことを言っただけ」

車窓の向日葵畑に終わりは無い。黄色と緑と青。ビビットなコントラストに楽しさを感じるのは初めてだ。

僕らはどこまで行けるだろうか。

「君と、いろんなところに行ってみたいな」

伊奈帆が呟く。

「……それは」

スレインが呼吸を挟み言葉を繋げる。

「“マップ”のどこかでは、ないんですね？」

言われて初めて、具体的な場所を想定していなかったと気付く。

「そうかもしれない」

「ふふっ」

スレインが身をかがめて笑った。肩と背中が揺れている。

「何？ おかしい？」

笑いが収まるのを待って聞いた。スレインは僕の顔をちらりと見て、また吹き出す。
「ちょっと」

「いや、……だって」

目の端を指で拭いつつ、スレインはこちらを向いた。

「今の。すごい口説き文句ですよ」

言われて、自分の発言を頭の中で繰り返す。

——いろんなところに行ってみたい。マップにもないどこかに。

……確かに、少し恥ずかしいことを言ったかも。マップの外に行こうだなんて。

「いいじゃん。君が好きなんだから」

スレインは何も言わずに僕の手に触れた。手のひらを重ね、互い違いに指を絡める。
接した手首の内側が、ドクンドクンと脈打っている。

「……帰りたくないな」

伊奈帆がぼつりと言うと、スレインは小さく頷いた。横目で見ると、金の髪が車窓の光を受けている。一本一本がきらきらとして、あったかそうで柔らかかそうで、なんだか

不思議な気持ちになった。

この髪に触れたい、と思うのは、これは、正しいことなのだろう。でも、触れずにそっ
としておきたいとも思う。むやみに触れると、壊してしまいそうだから。

電車の揺れと音に包まれ、影の深い座席で僕は並んで窓の向こうを見る。

「向日葵、綺麗ですね」

「そうかな」

スレインがくすりと笑う。

「本物みたいですよ」

「そうだね」

それは、確かにそうだと思った。僕たちは、この花が枯れないことを知っている。

繋いだ手。並んだ手首に黒い印字のナンバー。その位置と形は、反対側の僕の手にあ
る形によく似ているけれど、同じではない。

文字も。

数字も。

ずれている。

それは摂理と知っている。なのに。

手首の痣が疼く。

「伊奈帆？」

はっとして隣を見る。スレインが心配そうに僕を見ていた。腹の底に重いものが落ちる気がした。

こんな無数の“気のせい”を、これまで僕は何度知らないふりで通したろうか。

「大丈夫ですか？」

ガタンゴトンと音がする。音に合わせて、体が左右にぐらんと揺れる。二人の肩が何度かぶつかり、伊奈帆はその肩を支えた。薄手のシャツの布越しに、触れる肩は薄い。

18・7 と何千回目かの計算は、向日葵の色に重なった。

16・15 と何万回目かの計算は、向日葵の空に飛んでゆき。

20・16 と何億回目かの計算が、向日葵の影に溶けていく。

——あと四年。

肩を抱く。びくりと小さく肩が震え、視線が変わる。

澄んだ瞳に僕の顔が映り込む。

「明日は、うちにおいでよ」

予定調和のこの誘いに、スレインは目を見開いた。強張った顔が俯きながら笑みを作る。

「はい」

ぎこちない笑顔だが、声は嬉しそうだったので伊奈帆はほっとした。

「Ω・ST・0」

「ハア、ハア、ハア……！」

終わりの見えない通路を走り続ける。曲がり角で足が纏れ、その度肩で壁を押し、方向転換して進む。息が吸えない。視界が狭まる。心臓は破裂しそうだ。

「殺さず捕らえろ！」

背後からの銃弾が腿を抉った。前のめりに体が倒れるのがスローモーションのように認識され、スレインは下腹を庇う。

本能がそうさせる。なんと癪に障る本能だろうか。

手のひらが腹を覆う。臍の下。オメガの器官。

ここに、ある。それがわかる。

「……はは、悪い冗談だ」

死なせたくなないと考えてしまうのは、本能か？

「ボディを撃つな！ 足を狙え！」

次の銃弾が足首の骨を貫通した。

「ぐ、あ……！」

血だまりが広がる床の上。血を吸った服の、鉄の臭いに吐き気がする。幾人もの足音が床に接した頬を打つ。耳鳴りのする中、聞こえる怒声が頭蓋に響く。

「オメガの子宮を壊すな！」

スレインは反射的に笑おうとして噎せて咳き込む。胸が痛い。痛くない箇所などないが、それは慣れた感覚だ。モノ扱い。いいさ。そういう扱いに、僕ほど相応しい人間もそういない。

お前は怒るんだろうな。唇を引き結び、その隻眼でこちらを見据え。握った拳だけが時折震える。そういう静かな怒りを、僕が傷つき、目を覚ます度にお前は見せた。何度も。何度も。僕は、ずっと不思議だった。

どうしてお前が怒るんだ、と。

スレインは瞼の裏に浮かんだ記憶を噛み締めるように笑った。

……死んでたまるか。

死なせてたまるか。

「G・08、シャッターを封鎖しろ！」

数メートル先の通路、上下左右の四辺から、幾重にもなる壁が出現する。通気口もない。行き止まりだ。

「……はは、容赦、ないな」

銃声。

どこかが熱い。すごく寒い。

極限の状況で、感覚がおかしくなってしまったらしい。

— Ω・ST・0 確保 —

— 抵抗します —

— 薬を打て —

— クレイドルに影響は？ —

— 舌を切るよりいい —

身体が思うように動かない。脚が駄目なら、と腕で這うが、その腕を両側から掴まれ、床に押さえ込まれる。口に何かの器具がつけられ、意識が次第に遠のいてく。

……どうしてお前が怒るんだ、と。

僕を見下ろすお前の顔を見て、いつも思っていた。

伊奈帆。

僕より、お前の方がずっと痛そうだって。

――* IS 到着――

――パッケージしろ――

――プラントへ移送――

――任務完了。良かった。これで俺たちも、*“方舟”*の住人だ――

視界が閉じる。

分厚いビニール越しに、人の声が微かに聞こえる。密閉された身動きの取れない狭い場所。じくじくと流れ出た血が服にしみ込み冷えていく。首の後ろの噛み痕だけが認識できる。手足も胸も腹も心臓もどうなっているのかわからないが、オメガにしかない首の器官が僕はまだ生きていることを伝える。

お前が残したかったものは、こんなものじゃなかっただろうに。僕だって、そんなの

*搬送用陰圧チャンパー。アイソレーションストレッチャー。

欲しいと思わなかった。でも今は、この噛み疵を得難く、失い難く思う。

刻印のようなこの疵が言う。

生きなければ、と。

繋がなければ、と。

たとえもう、二度とお前に会えなくても。

なんて生き汚いだろう。

死が怖い。それはお前がいたからだ。

もしかすると、今、僕は幸せなのかもしれない。

人差し指の爪がアイソレーターの床面を引っ搔く。血に濡れてぬるりと撓む。

今になって、幸せだなんて。まるで悪い冗談だ。

でも、なあ。伊奈帆。

悪い夢より、悪い冗談の方がずっといいと思わないか。夢なら全て消えてしまいが、冗談だったら後で笑い飛ばせるからな。笑えないぞ、って。

今更気付いたのか、って。

「お邪魔します」

コンパートメントのドアが開き、スレインがぺこりと頭を下げた。

「別に、邪魔じゃないけど」

ハンドジェスチャーで入室を勧めつつ、伊奈帆は応える。そもそも、ここに来るよう提案したのはこちらだ。邪魔なわけがない。スレインが可笑しそうに声を漏らした。

「違いますよ。そういう挨拶です」

「そうだっけ」

テーブルセットの椅子を追加し、飲み物の好みを聞く。二人分のコーヒーに、分量の異なる甘味を追加。

「温度は？」

「あったかいのがいいです」

「了解」

出来上がったカップを両手に、テーブルへ。スレインの分をそちらに置いて、伊奈帆は席につく。今日のスレインは、第一ボタンを外した薄青のシャツとネイビーブルーのジーンズ姿。比較して自分の姿がどう見えるか心配になるくらい、様になっている。

「ふふっ」

コーヒーの湯気の向こうの顔が、くしゃりと笑った。

「何？」

「いえ、新鮮だなんて。伊奈帆の部屋」

そうかな、と辺りを見回す。テーブルセット。モニタールーム。バス・トイレ。調理スペース。パーテーションで仕切られたベッドとクローゼット。

「君のところも、同じような造りでしょ」

スレインは飲み物を口にちびちび運んで、少ししてから首を傾げた。

「そうですけど。でも、違います」

「ふうん。どういうところが？」

スレインはカップを戻し、すん、と鼻で息を吸う。

「匂いとか」

「におい？」

毎日清掃しているはずだが。におい。自分では気づかないが、そんなに残っているものだろうか。

「そんなに、におう？」

「僕には。そのおかげで、自分の部屋より気分がいいです」

フェロモンのことを言っていたのか。ほっとする反面、どきりとする。フェロモンが安定剤の働きをするっていうのは、それはつまり。

ちゃんと、“レンアイ”してるってことだ。僕ら。

「……なんか、反応に困る」

「そうですか？」

こっちの動揺がわかっていて、とぼけている。年上ぶって、と腹も立つが、まあいいか。気分がいいなら、それに越したことはない。オメガのボディは、ただ生きるだけで負担が大きすぎるのだから。できることはしてあげたい。

「これを飲んだら、しましようか」

スレインの言葉に、彼の手元のカップを見る。中身は既に無くなっていた。ネコジタ

の割に飲むのが早い。

「うん」

伊奈帆は湯気の消えた黒い液体を飲み干した。

寝室のスペースの照度を落とす。クリーンされたベッドが、暖色の光を柔らかく照り返す。

隣に腰を下ろすと、素足が四つ並んだ。肌の色が違うんだな、と伊奈帆は改めて認識する。白い素足は同じくらい大きさだけど、筋が目立って華奢に見える。

「……」

「……」

こういう時にどんなことを話せばいいのか、教えてくれればいいのにな。

スレインの足が交互に床から踵を浮かし、とん、とん、とリズムを刻む。伊奈帆もそれを真似してみる。気持ちいがほぐれて、隣を見た。視線がかち合い、気恥ずかしくて俯いてしまう。

と、とん。とん。と、とん。

素足の小指がちり、と擦れた。足が止まり、肩が触れる。ベッドについた手と手の小指の関節が触れ、指が絡む。

俯いていた顔を上げ、隣を見る。下を向いた横顔の目が、ゆっくりとこちらに向いた。視線はすぐに逸らされて、耳の後ろが赤く見える。

「こっち来て」

肩を抱き寄せると、だらんと身体がもたれかかる。力のない頬を支えて持ち上げ、キスをする。唇は柔らかくて、コーヒーのせいで少し苦い。

唇を離し、瞼を開ける。目が合った。照れくさくて二人で笑う。

「えっと、大丈夫？」

「伊奈帆こそ」

ぽんぽんと、肩を小さく叩かれた。ほっとして、抱き寄せる手に力を込める。自分と異なる体の温度が心地よい。よかった。ちゃんとやれそうだ。

「目、閉じて」

「……恥ずかしいですよ」

「開けてる方が、恥ずかしくない？」

「そうだけど……」

スレインは眉尻を下げ左右に目を泳がせたが、小さく名前を呼ぶと観念して両目を瞑った。

「……ふ」

次のキスは、もっと深く。舌を絡ませ、齒列をなぞり、口蓋に舌尖を這わす。口腔は熱くて、時々背中に電流みたいなのがピリピリと奔る。

「んっ……、ん、う……、……あ」

トン、と肩を押すと、スレインはあっけなく倒れた。仰向けの身体に覆い被さる。

「あ、ん……っ！」

耳の後ろを吸うと甘い嬌声が漏れる。首輪と皮膚の境目を指で辿り、襟元のボタンを外す。現れたのは肌と同色のプロテクター。顎の下から鎖骨の上まで、首全体をぐるりと覆うのは粘土のような質感の形状記憶セラミック。背中側の下部にある小さな正三角形のブルーランプは、“異常なし”を示している。

「はあ、……あっ」

脇腹に手のひらをあて、肌の上を撫で上げる。肋骨の窪みを指で押す。背が反り、腰の後ろに手を回す。背骨の凹凸がはっきりと分かるくらい細い。これ以上強く抱いたら折れてしまいそうだ。

「あう……、つ、あ……」

呼吸は荒いが、ランプはブルーに点灯している。腰を引き寄せ、乳首を人差し指の腹で擦る。

「ッア……!」

びくん! と背中が震え、スレインは自分の口を両手で覆った。伊奈帆は彼の硬くなった突起を親指と人差し指でクリクリ擦り、鎖骨の線に口付ける。

「あ、ああ、んっ……!」

抱く腰が焦れたように左右に揺れる。骨盤が開き、太腿が大きく広がる。着衣のままで腰を進め、下腹部が密着する。

「アア! ……ッ!」

濡れた唇にキスを落とす、固く尖った乳首に舌を這わす。背中がアーチを描き、目尻から生理的な涙が耳の方へ伝い落ちる。密着した腰を上から押し付ける動きを何度か繰

り返すと、スレインの踵が背中に回り、僕の腰を軽く蹴った。

「あ……、ま、まって……！」

ジーンズのボタンを外そうと伸ばした右手を、スレインの左手が掴む。

「……嫌？」

「いやじゃ、なくて……」

「ごめん、性急だったかもしれない」

肩で息をして涙を流している姿を見ると、頭の奥がすうっと冷えた。これ以上は、やめた方がいいだろう。

「ちがう……、嫌じゃないし、気持ちいい……です」

スレインの手が僕の両肩に乗る。小刻みに震えていた。

「その、……少し、怖くて」

きゅ、と指先に力が籠る。その手に自分の手を重ねる。僕らの手は同じくらい、震えているのに安心する。

「嫌じゃない？」

「嫌じゃないです！」

スレインはぶんぶん首を振り、困った顔で微笑んだ。

「すごく気持ちいいから、その……。僕、どうなっちゃうか、わかんなくて」
笑みが漏れる。ああ、そっか。スレインも、初めてなんだ。

「僕もそう」

笑顔を交わし、髪を梳く。スレインは心地よさそうに目を細め、胸の上下がゆるやかになる。すうはあと、スレインが深呼吸した。

「もう、大丈夫、です」

気丈な笑顔に気持ちがいこみ上げてきて、僕は聞いた。

「キスしていい？」

スレインは目を丸くして僕をじいっと見た後に、馬鹿ですね、と吹き出した。

「そんなの、聞かなくていいんですよ」

目を閉じて触れた唇は、ころころ笑いが漏れていて、甘酸っぱい匂いがした。ボタンを外し合ったシャツが、床の上で重なった。

「ふ……」

肋骨の素肌に手のひらを押し付ける。さすると、扇情的な吐息が漏れた。腋をくすぐると、くすぐったそうな笑いが聞こえる。楽しそうだし、気持ちよさそうに見える。

初めて見る。初めて触る。自分ではない身体。肌の色が僕よりずっと白くて、肉づきが薄い骨格。細身の身体で骨盤だけが、オメガの特性を表し外に広がっている。

アンバランスな身体の線。いや、それはボディだけのことではない。骨格も、表情も、人格も。ふとした時に見せる顔。声。言葉。そういうものがどこか歪で、力を込めたら壊れてしまいそうで。危ういんだ。

「ひぁ……っ」

指で触れるとそこはもう湿っていた。思ったよりも柔らかくて、軽く押し付けると中指の第二関節までずりりと飲み込む。

本当に、僕とは別の器官なんだ。

「う……、あ、っ」

そのまま、右手の中指の根元までを挿し入れ、前後にゆっくりと動かす。仰向けのスレインの腰を両腿に乗せて、挿入部をほぐすため人差し指、薬指と増やし広げていく。

指を出し入れすると、汗ばんだ太腿がピンと張り詰め、投げ出された爪先がもどかしげにシーツを掻いた。

「ひっ……!! あ、あ!」

指の腹で内壁を擦ると、きゅう、と媚肉が切なげに締まる。そういうことを繰り返しているうちに、後孔の滴りが溢ればたばたとシーツの上に落ちて染みになる。

呼吸の音と、ぴちゃぴちゃという水音だけが部屋に響く。

ひくひくと、指を締め付ける部分が一際大きく痙攣した。

「あ……、んっ……。……ねえ、いなほ……。もう……。っ」

うわ言のような、とろんとした声。指の動きを止めると、そこはまた震えた。

「なに?」

はあ、はあ、と大きな息をゆっくり吐いて、吸って、スレインは左右に目を泳がせた。頭の下に敷いた枕の左右を両手でぎゅっと握る。

「……もう、こっちは、……。その、準備が、できましたから」

「え?」

もう一度、右手の指で内部を探る。熱く濡れて、ざらざらとして柔らかい。前後に動

かすときゅうきゅうとよく反応する。

しかし、まだ狭すぎる。

「これじゃあ、入らないよ。傷つけたくない」

伊奈帆の言葉に、スレインはふわりと笑った。腰がゆるりと円を描き、臍の下がびくびく震えるのが見える。

「だい、じょうぶ……、ちゃんと、広がります。……そういう身体なんです」

「……わかった」

ずるり、と指を一気に引き抜く。濡れそぼった指は火照って赤くなっている。

「う、あ……！」

引き抜いた場所は、物欲しそうにひくりひくりと収縮を繰り返す。爪先が張り詰め喉が反る。陰茎がエレクトリシ、仰向けの腰が上下にピストンを繰り返す。クライマックスが、すぐそこまできているのがわかる。

「ハア、ハア、ハア……ア！」

ごくりと唾を飲み込んだ。その様子から目が離せない。自身が張り詰めてくるのがわかる。

ぬらぬらと濡れるあの場所は、きつとすぐ――。

「……っは、……あ、――アアッ！」

背骨が反る。突き出た恥骨の出っ張りが天井を向き、挿入部からは愛液がつう、と糸になってシーツの上に滴り落ちる。張り詰めたペニスは大きく膨らみ、絶頂に達したのちに乾いたまままで硬さを失い弛緩した。

「っは、はあ……っ！ はあっ、はあっ……」

脱力した身体がシーツに沈む。我に返り、横に寄り添う。体中が汗に濡れて、胸に触れると肌は驚くほど冷たい。頬も額も蒼白で、カラーのランプはブルーの点滅状態にあった。

「スレイン？」

呼びかけると、ぎよつとした顔でまじまじと見られ、プイ、と向こうを向いてしまった。

「なに？ 気分悪い？ 大丈夫？」

「……」

無言。顔色悪いし、もう休んだ方がいいかもしれない。

「スレイン？」

「べつに。……はずかしいだけ」

返事があつてほつとした。しかし意味が分からない。

「恥ずかしい？ え？ 何が？」

「なにがつて……」

肩越しにちらりと振り向く唇はつんと尖っている。

「……一人で盛り上がつて、恥ずかしい」

はあ、と肩の力が抜けた。なんだ、拗ねてるだけか。

「いや、問題ない」

「は？ 問題ないつて？」

伊奈帆の言葉に、半身を起き上がらせてスレインは振り向く。

「君がいくところ見て、僕も危なかったから」

ぽかん。口を開けた間抜け面でまじまじと僕を見た後で、スレインはがばりと体を起こしにじり寄る。

「じゃあ、僕の番」

「え……？」

強気な態度に気圧されて、思わず後ろに重心がかかる。スレインは四つん這いで近づいて、至近距離で裸の身体に屈みこむ。

「え！ ちょっと、……恥ずかしいんだけど」

いくらなんでも近すぎ……、という言葉は飲み込んだ。スレインがフン、と鼻を鳴らす。

「さっきまでじろじろ見て、さんざんいじくってたのはそっちでしょう」

「そうだけどさ……」

「だから、今度はこっちの番」

指先がおずおずと先端に触れ、竿の部分をじわりと握る。パンパンに張り詰めていて、少し触られただけで先走りがある。

「思ったよりも、硬いですね」

包んだ両手が上下にスライド。裏筋に沿った中指の刺激で、痺れに似た感覚が全身に伝わる。心拍数が上昇し、呼吸の速度がどんどん増す。優しい手つきがじれったい。ペろ、とざらつく感触が先端にあり、滲んだものを舐め取った。

「う、あ……………」

「ん、う、…………ふ」

スレインの舌先が亀頭をつつき、べろりと舐める。暴力的な快感が背筋を駆け上がり、思わず前に腰を折る。

「うっ…………、あ」

上目遣いがにやりと笑い、竿の中ほどまでが咥内に収まる。蕩けそうに熱くて、歯と舌の刺激を受け、どくどくと血流が下腹部に集中する。

「ま、まって…………っ、う」

やばい。出そう。だめだ、はやすぎる。かつこ悪い。快感をやり過ぎたため、目を硬く閉じ、歯を食いしばって素数を数える。 2 3 5 7 11 13 17 19 23 29 31 37

41 43 ……。

「ふ…………」

吐息が臍のあたりをくすぐった、思わず声が出そうになるが、なんとか耐える。それを知ってか、スレインは陰茎を口に含んで愛撫したまま、亀頭球・ノットを揉み始める。

「うあ…………！ つ、それ、…………だめだつて」

頭が真っ白になる。が、なんとか、まだ、うん。まだいける。頭のどこかが冷静に、精液を今一度に放出すると、窒息の危険があるかもしれないと考える。

「すれ、いん……、もう」

オメガの射精は空打ちだが、アルファの射精は違う。ノットに溜まった大量の精液を一〇分から三〇分かけて放出し続ける。まさか、知らないのだろうか……。

理性を手放す直前に、開放感とちゅぽ、というリップ音。ビキビキと張り詰めた性器が痛くて苦しくてたまらないが、とにかく危機は免れた。

「はあ、はあ……」

薄目を開けると、スレインが困った顔で笑っていた。

「ごめんなさい、つい」

真っ白な頭が、徐々に思考を取り戻す。はあ、と大きく息をして、酸素で肺をいっぱいにする。

「……あぶないところだった」

もうちよつとで、スキンもなしに出してしまうところだった。あのまま射精していれば……。スレインの喉に詰まる自分の精液を吸い上げる救命活動を想像し、そうならず

に本当に良かった、と心の底からほっとする。

「伊奈帆の、意外な顔が見られた」

余裕のない顔かわいいですよ、とからかわれ、どっちがさ、と言いつ返す。スレインの視線が一度下に向き、上目遣いがにこりと笑った。

「そっちの準備も、ばっちりですね？」

これまで見た事のない、強い昂りが中心にある。

「……誰かさんのおかげだね」

僕はスレインに恨みがましい目を向けて、ヘッドボードに腕を伸ばす。

コンドームをつけて、対座の形で向かい合う。スレインが膝立ちになり、伊奈帆の肩に両手を置いた。

「……じゃあ、……乗りますね」

伊奈帆はスレインの腰骨を両側から掴み、動きをサポートする。濡れたアヌスがゴム越しの亀頭に吸い付く。接しただけで達しそうな多幸福感を感じ、大きく息を吐く。それ

は向こうも同じのようで、肩を持つ手に力が籠り、爪が皮膚に食い込んだ。

「……っ、……っく」

腰がゆっくりと沈む。亀頭の一番太い部分が、なかなか入っていかない。もどかしい動きた。腰を打ち付けたい衝動に襲われるが、奥歯を噛んでじっと耐える。掴んだ腰骨を少し離す。

「……？」

スレインが怪訝な顔で伊奈帆を見る。眉を顰めた表情で、額に髪が張り付いていた。その髪を、伊奈帆は指でかき上げてやる。

「斜めに、こう。きて」

「あ……」

こくりと頷き、スレインが角度をつけて腰を下ろす。すんなりとはいかないが、肛門筋は徐々に広がり、何度か試すうちに亀頭は中へと収まった。

「っ……！う、う……」

異物感を感じているのだろう、スレインは真っ青な顔で目を瞑り、浅い呼吸を繰り返している。薄く白い腹が力む。伊奈帆はその、小さく窪んだ臍のあたりをじっと見る。

ここに、あるんだ。

こんな、先に。

直腸の先に、オメガの子宮が。

「……苦しい？」

お互い初めてなのだし、受け入れる側は辛いだろう。動かないよう腰を強く掴んだまま問いかける。固く閉じた瞼が開き、涙ぐんだ瞳がぼうつと伊奈帆の顔を映す。焦点が合うと、両目が三日月の形に細くなり、口元が弧を描いた。見た目に反して、強情張りなんだ。

「反対、向いて。その方が楽だと思う」

「はんた……うわ……!!」

腰骨をがっちり掴み、繋がったまま挺子の原理で身体を表と裏を入れ替える。

「あ……う……」

四つん這いに近い姿勢で、後ろから挿入する後背位。膝を立てせ、結合部分の高さを保つ。

「かはッ……、ぐっ……!!」

力んで、肛門筋がぎゅうぎゅうと締まる。圧迫感と苦しさでスレインは咳き込んだ。伊奈帆は背を撫でる。

「力抜いて。息、吐いて」

「……ふ、う、……ふ……っ」

深い呼吸を繰り返すうち、身体の緊張が徐々にほぐれ、動くゆとりができてきた。

「ゆっくり、挿れるから」

首がこくと頷いた。首の後ろのカラーのランプは青い光を灯している。

腰骨に指をかけ、体重を徐々に前に移す。一番太い亀頭部分が、直腸の内壁をぎちぎちと押し広げる。中が濡れてほぐれていても、初めての性交では互いに苦しい。

「ふぁ、あ……、はぁ……ッ」

根元近くまで収まると、過ぎた場所は先へ先へと誘うように伸縮を繰り返し始める。支えていた腰が、最奥へ先端を迎えようと円を描いてゆらりと揺れる。

きついと感じていた内側から、快感を感じ始めているのに気づくと、腰が、ぐっ、と深く沈んだ。ピン、と見下ろす背筋が線になり、媚肉が根元から先端へ向けて精液を絞るように締めあげる。

「は、あ、……っ、うごく、よ」

スレインはコクコクと頷き、荒い息を繰り返す。返事をする余裕はなさそうだ。それはこちらも同じだが。

ゆっくりと抜き差しをするたび、ぴちゃぴちゃと、卑猥な水音が鼓膜の内側に反響する。

「ア……ン、あ、……あ！」

内壁を腹側に擦り上げると、背が反り、高い悲鳴が上がった。内壁のざらつきと断続的な痙攣にペニスの硬度が増す。

「ひあっ……!! あん!!」

ノットが大きく膨らんで、ピストンの度、割れ目にあたる。薄い臀部を両手で掴んで揉みしだく。中の滑りと弾力が一層増す。

「あ、あ! はあ、はあ、……あ!」

背中の方こうに見える、ベッドに押し付けた肩と、枕を握り締める両手と横顔。目元は赤く、頬とシートは涙と汗と唾液で濡れていた。眉間に皺を寄せ、歯を食いしばり懸命に耐えている。

「っ、……あア！ あ、は、ア……！」

スレインが首を掻きむしる。皮膚の色とほとんど同じの形状記憶セラミックスが、爪との摩擦で耳障りな音を立てる。頸椎で光るランプの色が黄色に変わった。

「スレイン……！」

手首を掴み、両手首をクロスして、彼の頭上に左手で押さえつける。抵抗を感じるが、解放することはできない。動きを弛め、脇腹や胸をやさしく撫でる。ブルーランプの点滅が、背骨の陰影に映り込む。

「……そこ、を！ ……っ、かんで！」

スレインはさかんに首を振って、肩をベッドに打ち付ける。求めているのだ。性交以上の快感を、カラーの下のおメガのうなじがアルファの八重歯を。ボンドバイトを。

「……い、……なほっ」

本能的に、伊奈帆は首に歯を立てた。ぎり、と顎に力が籠るが、カラーは硬く、素肌を模したセラミックに数ミリ食い込むだけに終わる。

「アア……ッ！ ……ハ、ア、はやく……、かん、で……！」

泣き声の懇願に、角度を変えて何度もそこに噛みついた。このためのプロテクターだ。

喰い破れるわけがない。そう分かっているのに、止められない。身体と頭が食い違う。

「はや、く……！ア、ア、もう……！」

スレインの腰が性感を求めて激しく動く。無理な動きで裂けた結合部の皮膚から、鮮血が腿を伝った。背中から抱きつき、胸と腰に腕を回す。背中和胸が密着し、鼓動が互いの胸を打つ。奥の壁に当たる度、絡みついた内側はぬめり脈打ち、ノットは体積を増し、直腸から押し出された精液がスキンの端からこぼれ出る。

「ハアッ…、ハアッ…！……ア、あ！」

「ハア、ハア、ハア、ッ、……ッ、く……う」

ぼたぼた落ちて膝を濡らす液体が何なのかもわからない。

性器も肌も、心臓も。何もかもがぐちゃぐちゃになって、どこまでが自分かわからなくなる。

視界が白く染まっていく。頭の中で何かが弾けた。

「く……！ウッ……！」

びゅるびゅるる……。入りきらなかったノックをつぶすように恥骨を押し付け、最奥へ先を押し込む。びくびくと、これまでにない収縮がうねりのように僕を包む。

「ッ……は、あ、あ……—アア！」

逸らす背が胸を打ち、仰け反る頭が肩に当たる。何かを探して宙を切る手の手首を握る。射精を続ける性器が強い圧迫で硬さを取り戻す。オーガズムの直腸が、別の生き物のように蠢く。

「…………ッ！…………う、う、…………っ」

硬直する身体。自分の全部が体の中から抜けていくような感覚が怖くて、腕に力を必死で込める。濡れた胸を掻き抱いて、決して届かないうなじに齒を食いしばる。

目を覚ますと、寝息が聞こえた。

瞬きを繰り返す。ナイトモードの天井が、影を持たない淡い光を発していた。身体が軋んでぎこちない。手や足は重く、動かすのが億劫に感じた。左の腕に温もりを感じる。寝息も左側からだ。首だけを動かす。すぐ近くにスレインの寝顔があった。閉じた瞼が腫れぼったい。頬骨の上に、薄く隈が浮かんでいる。疲労は濃いが、安らかな表情で眠っていた。

……そっか。上手く出来たんだ。よかった。

手足を折り曲げ背中を丸めた姿勢で眠るスレインの、右の手首の内側が上を向いていた。伊奈帆は半身を彼に向け、重い右腕を前に運ぶ。

投げ出された、細い手首の内側。隣に、自分の手首を並べてみる。覆いのない素肌の色は少し違う。けれど、同じ部分に、同じ色の、同じ大きさの痣がある。

α	Ω
$\vdots$	$\vdots$
IK	ST
$\vdots$	$\vdots$
7	18

伊奈帆はそれをじつと見る。

20	16	18
$\vdots$	$\vdots$	$\vdots$
16	15	7
$\parallel$	$\parallel$	$\parallel$
4	1	11

そしてまた、何度も何度も繰り返した、意味のない計算をする。

「……あと、四年」

焦点を手首から寝顔へあてる。急にまた視界がぼやけて、伊奈帆は枕に顔を埋める。
瞼の裏の暗闇で、あの計算がまた浮かぶ。

18
・ 7
|| 11

……こんなに違うんだ。
僕らの時間は。

「α・IK・0」

散光式蛍光灯が細い通路を赤色に染める。

「逃亡者視認！」

「確保！」

銃弾が頬を掠めた。入り組んだ通路の逃亡ルートを再検索する。

-blocked--blocked--blocked--blocked-.....

駄目だ。確保していたこのルートを行くしかない。

-to--escape passage-

-enemy--4--3--8--2-

-escape pod-

-usable--one-

伊奈帆はスレインの背中を押した。

「行って」

スレインが弾かれたように振り向く。

「馬鹿言うな」

「お願い」

視線が交錯する。ここに至って、伊奈帆は思う。この目なんだ、と。言葉よりも多くを語る瞳の色は、全てを見透かすような深さで、いつだって澄んでいた。今も。

「……死ぬ気か？」

伊奈帆は笑う。

「まさか。約束は守るよ」

僕が嘘を吐く時、笑うようになったのはいつからだったか。

「伊奈帆……」

多分、彼に出会ってから。

互いに、これが最後だ、と理解した。反射的に足が床を蹴り、手が後頭部を抱き寄せる。互い違いの位置にある、肋骨の檻にある心臓が激しく打つ。

彼の背中を抱く腕の、手が脊椎を上へと辿る。血のこびりつく指が、上から五番目の頸椎の突起に触れる。

消えない菌型。消えない痕。消えない過去。消えないものは、痛みばかりだ。

それらを抱えて、生きろと言う。なんてひどい人間だろう。

もっと、違うものを与えたかった。違う所に行きたかった。二人で一緒にいたかった。できれば一緒に生きたかった。

「二度と会えないかもしれないけど、……ずっと」

「言わなくていいよ。そんなの」

一緒に死ぬより、最後まで藻掻き、生きることを選んだ。選んでくれた。それで充分だ。

スレインが身動きし、抱き合っていた体が離れる。自身の首の後ろに両腕を回し彼はペンダントを外す。

「きつと、また会える」

こちらを見つめる笑顔は無様で、きつと、今の僕も鏡のように似ているはずだ。スレインが伊奈帆の首に腕を回し、ペンダントを首にかける。

「貸すだけだ」

いつか、の約束なんて、柄じゃない。お互いに。

「借りとくよ」

でも。この手を離すには未来の約束が必要だった。

「なくすなよ。伊奈帆」

スレインが右手を差し出す。伊奈帆はその手を右手で握る。

「うん。約束だ」

「ちゃんと返せよ」

握り返す手の力、硬さ、その温度が。

なんと得難い、失い難い生命だろうか。

迫る足音に、突き飛ばすようにその手を押す。左眼に非常シャツターの閉扉をコマンド。スレインは扉に向かって床を蹴る。

「スレイン」

名前を呼んで振り向く。

シャツターが起動。閉じるまでレイコンマの刹那が連写のように鮮明に視覚される。数センチの隙間から、最後に見えたのは、細い顎と頬の笑窪。

声は、その後。壁越しだった。

「またな、伊奈帆」

彼の残したペンダントを握り締める。体温や心が、ここに残っている気がして。そして伊奈帆は呟いた。

「ごめん、スレイン」

左の手にある、ハンドガンのグリップの模様が肌に焼き付く。

「銃を、渡してあげられなくて」

僕が殺してあげられなくて。

脱出用ポッドまで、最低でも十七人。

たどり着けるはずもない。でも、可能性が全くないわけじゃない。

武器を持たない状態で。

スレインが追手を振り切り脱出用ポッドに辿り着き。

それが使用可能な状態の一機で。

正常に起動し。

生きて地球に戻る確率。

—○・○○○○○七一%

0 じゃない。

「ごめん」

不可能に近い脱出に、僕の命を使ってしまつて。

夥しい足音が突如停止。こちらを向く三十九の銃口。

伊奈帆はそれらに正対する。降伏を迫る声は怒号に近い。

「君のためじゃない」

胸に守りを。左手に銃を。

「僕のためだ」

右手を、左眼に。

「テン・ゼロ」

接続をオートからマニュアルへ切り替える。

-Hello world-

世界が広がる。見えなかったものが見える。知らなかったものがわかる。

「やあ、久しぶり」

-Hi, buddy, command?-

この眼でかつて、君を探した。

星の海を。月の影を。この眼で見た。クレーターの起伏の陰影や、視界の中の星の数とそれぞれまでの往復時間。膨大なデータ。シナプスの競合。電子の海で溺れそうな視界に落ちる、ウミネコの白い影。

伊奈帆は知らず微笑んだ。群衆が静止する。

君を、見つけられてよかった。

どうなってもかまわない。死なないでほしい。そのためにできることは全部やる。それだけだ。

「10・98」

10・4・

Nest

歯ブラシが二本。

コップが一つ。

洗面所。伊奈帆は顔を拭きながら、不思議な気持ちでそれらを眺める。見ているとそわそわして、恥ずかしいような嬉しさを感じる。自分が自分じゃないみたい……。うほどではないけれど、自分の意識には未知の領域がこんなにあるのだな、と自己理解が進む。

コンベアの回収ハッチを開く。使用済みの布類を押し込んで、新しいものをクローゼットから取り出す。

それらをテーブルに置き、このテーブルも出しっぱなしだな、と何とはなしに考える。一時置き衣類の他に、端末や薬、授業のファイルが、雑多な感じで置いてある。

物が増えたな。

伊奈帆はキッチンの調理スイッチを押す。コンベアの支給口にポン、と食事が二つ落

ちる。普段のトレイ型ではなく、コンパクトにパッケージされた手のひらサイズの携帯食料。ここ数日、こればかりだ。ヒート時の食事としては効率が良いのだが、学食に慣れてしまった舌には食感が悪く、喉が渇くのが難点である。

飲み物はコーヒーにする。甘味の設定をどうしよう。……普段より、少し多めにしておこうか。

ボタンを操作し、提供を待つ。

誰かと暮らすって、不思議な感じた。使用時以外は毎日収納していたテーブル。初めてスレインがここに来て、向かい合って座った日のことが思い出された。

あの日も、コーヒーだったつけ。

ハッチから二人分のコーヒーを取り出し、伊奈帆は寝室へと向かう。

間取りが拡張したコンパクトメントで一週間の共同生活。オメガのヒート。僕らにとって、これで四度目にあたる。

ヒート専用エリアには、備え付けの洗面所とベッドがある。伊奈帆のこれまで使用し

ていた寝室と一続きで、それを入れるとベッドは二つ。使用中は新しい方。温白色の室内灯が照らす大きな円形のベッドの上には、折り重なった衣服が山を成している。伊奈帆は、ヘッドボードにカップと食事を並べ、盛り上がった部分に向かって身をかがめる。

「スレイン？」

衣類の山がもわんと揺れた。

「……いなほ？」

くぐもった声が聞こえる。

「ごめん、起こした？」

「ううん。……ねたり、おきたりで」

声の方へ回り込み、腰を下ろして布の上から手を当てる。

「居心地はどう？」

「ちゃんと、伊奈帆の匂いがあります」

「……そういう言い方、反応に困るよ」

巢作り―ネスティング―は、成体オメガの習性だ。ヒートの時期、オメガはアルファの身に着けたもの、フェロモンの残るものを集め、その中で寝起きする。ヒートで不安

定なオメガの体調が、アルファのフェロモンで整う。

もぞもぞと身動ぎして、服の間からスレインが顔を出した。頬が紅潮して目が潤んでいる。額に触れると、普段よりも体温が高いが、ヒート症状は軽度だ。

「はい。コーヒー飲める？」

ヘッドボードに腕を伸ばし、甘味の強い方を選んで渡す。スレインは体を起こし、両手でそれを受け取った。

「ありがとうございます。……ああ、美味しい」

伊奈帆も自分の分を取って飲む。胃が温まり、気持ちがほぐれる。

十二、十三、十四……。

だからつい無意識に、布から露出したスレインの肌の鬱血の数を数え始めてしまい、それに気付いてかあつと耳が熱くなる。伊奈帆は慌てて目を逸らし、コーヒーをぐぐりと飲む。

「……へへ」

「何？」

スレインが笑ったので、ぶっきらぼうな声を出してしまった。

「伊奈帆のところに、初めて来た日を思い出してました。覚えてます？」

あの時も、コーヒーでしたね、とスレインは囁く。

「僕も、さっき同じことと思ってた」

スレインは口元にカップを寄せ、笑みの形に両目を細める。

「学食で、コーヒーなんか頼んだことないのに。どうしてです？」

「それは……」

コーヒーは、好きじゃなかった。香りが強いし、味が濃い。覚醒作用とその反動で、ペースを乱されて煩わしい。と、思っていた。今ではそれが“おいしい”と思うのだけ
れど。

不透明な黒色の水面に映る自分を見つめる。

どうして、かな。……多分。

「緊張してた、のかな」

うん。緊張していた。ちゃんと出来るか不安だった。向こうも初めてだって知っていたけど、上手くできずにがっかりさせたくなかったし。

「嫌われるのが、怖かったのかも」

言った後で、カッコ悪いな、僕、と思った。コーヒーを飲み干す。こんなこと、言うんじゃないかった。

「……へへっ」

スレインの声。

「何？」

不機嫌な声が出てしまったが、スレインはにこにこしている。

「同じだなんて、嬉しくなって」

「同じ？」

「僕も、ちょっと怖かったから」

同じですね、と微笑む口にキスをする。

「……甘いね」

僕が言うと、スレインはくすぐったそうに口角を上げる。飲み終わったコーヒーカップを受け取ると、中身が少し残っている。口に含むと甘さもあるがすごく苦い。僕の顔を見て、スレインは喉で笑った。

「食事にしよう」

食事を取って、袋を破る。膝の上でタブレットミールを一口サイズに割り分ける。欠片の一つを口元に運ぶが、スレインは微笑み首を振る。

「ううん」

「でも……」

伊奈帆自身はさほど空腹を感じていないが、前の食事は二十時間以上前。カラーのラシブは青色だけど、体力は落ちているだろう。

「食べない方が、気分がいいんです。……それより」

きて、と伸びた腕が首に絡む。床にミールが散らばって、コーヒークップが床を転がる。ベッドに膝で乗り上げ、熱い身体を抱き寄せる。着替えたばかりのシャツの背を彼の左手がたくし上げ、唇が重なり、深い場所で舌が絡む。

「ん……、っ……」

……不思議だな、甘い。

「……う、……っあ、ふ……」

巢―ネスト―の中心で、向かい合って啄むようなキスを繰り返す。閉じた瞼を時々開き、キスの合間に目が合った。顔が離れ、スレインが膝立ちになる。少し上から見下ろして、僕の頭をその手が撫でる。髪を通る指の温度が心地よい。肋骨に触る。鬱血の痕に唇を当てる。昨日もここにキスをした。

「……あ」

胸の突起を舐め上げる。赤く熟れて、ぷくりと膨れた乳輪を舌尖でなぞる。

「……ん、……う」

スレインの手が髪をぐしゃぐしゃと掻きまぜる。耳の後ろを指先が掠った。

「……っ、あ、う！」

尖った乳首にちう、と吸いつく。嬌声が上がり、身体が悩まし氣にくねる。

「う、……ア、あ……ん！」

逃げようとする身体を抱きしめる。耳の後ろに熱い呼吸。

「気持ちいい？」

こく、と肩に額が当たる。

「……う、っ、すごく。……でもっ」

瞳を合わす。碧の双眸が切なげに揺れた。スレインは右手の指を自身の首の後ろに滑らす。

「ほんと、は、……首が、いいんです」

その言葉に、セラミックを擦る歯の感触が蘇った。外せないカラー。オメガのうなじをアルファの牙から保護するための。

「それは……」

「できないのは、知ってるけど……」

もどかしくて、と彼は右手の爪でカラーのランプを引っ搔いた。ブルーランプがゆるやかな速度で点滅する。それを彼は、何度も何度も繰り返す。

「爪が割れるよ」

見ていられなくて、首を搔く手を僕は掴む。

「……痛くない」

スレインは首を振る。右手で彼の右手を握ったまま、左手で乱れた金髪を耳朶の薄い耳にかける。

「後で、痛くなるよ」

泣きそうな目が僕を見た。

「ごめん、困らせたいわけじゃないんだ」

握る手の、爪の先にキスを落とす。長方形の美しい爪の形。今ではこの爪痕が幾筋も背中にある。

「……傷ついてほしくないだけ」

「傷つけられてもいい。……伊奈帆になら」

強い力が僕の肩を押す。背中から倒れ込み、起き上がろうとする前にスレインが腰の上に跨った。

「酷くして。お願いだから」

噛めないのなら、せめて。打って、裂いて、痛みを感じさせて、と。

「……そんなの、無理だよ」

「いいから。……じゃないと、おかしくなりそう」

「でも、」

言葉の終わりを待たずに口を塞がれる。熱くて深い、なんて苦いキスだろう。

「はあっ、はあ、……っ、く」

スレインの腰が下腹部に密着する。手淫も口淫もない性器同士が擦れ合う性急な愛撫。「はぁ……ッ、……ん……っ」

肩に指が食い込んで、腰が体重で沈む。十分な滑りもなく、ほぐれてもいない内壁を雄茎が穿つ。

「アア……、あ、……っ、う！」

痛みを伴う激しい抽挿。見上げる顔は苦痛に歪み、蒼白だった。

狂ったように上下する腰を両手で掴み、動きを止める。スレインが激しくもがき、自身の首に指を回す。プロテクションカラーに指は食い込むこともできない。力を込めた指先の、爪の色が真っ白になる。

挿入したまま上半身をなんとか起こし、肩を寄せて背中を抱く。バランスを崩したスレインがこちらに倒れ込む。

「……っ、い、なほ！」

暴れる腕が、肩や首を引っ掻いた。伊奈帆は腕に力を込める。離す気はない。

「駄目だ、こんなの」

あちこち痛いし、結構重い。それでもいい。ポンドバイトはできないし、打ったりす

することもできない。スレインが本当にしてほしいことは、何もしてあげられない。僕にできることは、見当違いのズレたことかもしれないけれど。

抱く腕に力を込める。熱い身体。

華奢で壊れそうだけど、ちゃんと重い。

「痛いのと、気持ちいいとは別のことだよ」

スレインがびく、と動きを止めた。行き場を失いさまよう腕を引き寄せる。爪の間に、血がこびりついてる。僕の血だ。震える指の間に指をさし入れぎゅうっと握る。

うつ伏せに重なったスレインの首の後ろが右側にある。肌と同色のセラミック。生殖可能年齢になったら装着されるオメガの首輪。自分では絶対に外せないし外れない。その時が来るまでは。

「……その時が来たら」

その時が、僕らに来るかはわからない。

僕が今から言う言葉は、酷いことなのかもしれない。

「その時が来たら、僕が君のうなじを嘔むから」

スレインが顔をゆっくり僕へと向けた。感情の凪いだ瞳は青く透き通っている。

僕は彼に笑って見せる。

「気持ちいいことだけしようよ。今は」
ぎこちなく、繋いだ指が握り返される。

「……うん」

「あ、……っ、……う」

両手を繋いで、スレインは跨った腰を上下左右にゆっくり動かす。強張っていた内側が徐々にほぐれ、快感が生じる。

「動かすよ」

「……っ、うん」

下側からも腰を揺らす。内壁を擦り上げる角度が変化し、波立つような収斂が伝わる。

「はあっ、はあ、は」

不安定によるめく上半身を、繋いだ両手で下から支える。金の髪があちこちに跳ね、額と頬に細い束が張り付く。

「……っ、いなほ、もっと……」
熱っぽい声。

「……気持ちいい？」

中を掻き混ぜながら見上げる。ゆらゆらとゆれる顔がはにかむように笑った。

「……うん、もっと、ほしい」

沈む腰と突き上げる腰がぶつかって、ぱちんぱちんと音を立てる。上下する薄い胸から、汗の雫がぼたりと落ちる。

先端がざり、と何かを擦った。スレインが悲鳴のような嬌声を上げ、繋いだ両手がざりざりとすごい力で握られる。

「あ、う……、そこ……！」

さっきの場所に向けて腰を打つ。ぎゅう、と腸壁が強く締まる。

「アア……あ、もっと……っ！ いな、ほ……！」

がん、がん、と骨同士がぶつかる。バネのように身体が跳ね、昂りが抽挿する。雁首が前後を激しく行き来し、同じ形に柔褌が吸い付く。龟头球が硬さを増して、溢れた白濁がぱちんぱちんと水音を立てる。

「ハアッ、ハアッ……!」

もう、限界に近い。硬く張り詰め、極限まで肥大化したペニスの先がごり、と硬い部分に届く。

「うっあ、ア!——アアア!」

スレインが叫び、背中が弓なりにしなる。彼の勃起した陰茎がぶるりと大きく震え、隘路が愛液で満たされる。括約筋が収縮し、精子を求めてノットを抜く。

「っ……、くあ!」

射精が始まる。暴力的な快感に視界が消えて、意識を失いそうになるが、頭を振って体を起こす。

「すれ、……い」

「……あ、あ」

ガクン、と喉が向こう側に仰け反った。腕を引っぱり、前に倒れる体を抱きとめる。ビクビクと、背中が痙攣している。肩で支えた頭を撫でる。触れた肌は汗でじっとり濡れていた。冷えた肩を抱く。

「あ——……、はあ——……っ」

呼吸の度、甘い色が吐息にかかる。頬を持ち上げ顔を見る。こちらを向けた潤んだ目は、焦点が定まらずどこか遠くに向いていた。

「……スレイン？」

「は——……っ、あ——……」

絶頂が続いているのだ。ドライで達し、肉襞は伸縮を続けている。

結合したまま、脱力した身体を仰向けにする。大きく開いた両脚が、濡れたシートにくたりと沈む。半開きの唇にキスをして、額と頬の髪を梳く。

「はあ——……っ。は——……っ」

蕩けるような眼差しをじっと見下ろす。視線は交わらない。ぼろぼろと生理的な涙が目の縁からこぼれ落ちる。濡れた目尻を指の背で拭う。何度も。

「ああ、……あう、う——……」

もどかしげに腰が揺れた。もっと、と媚肉がざわりと撫で上げる。腰を密着させて、射精の続くペニスを奥に押し当てる。押し出された白濁がスキンの端からばたばたこぼれた。肘をつき、彼の背中に手を回して引き寄せる。

「はあ、んっ……、あ、……ア」

向かい合い、胸を合わせて横たわる。繋がったまま動かずに、乱れた金髪を手櫛で梳く。

「は——……っ、あ——……」

溶けあうような温もりに包まれながら、濡れて光る髪を梳く。

“巢”の中で、眠る額に口づける。暗い照明のせいで、髪の色は鈍い銀色に見えた。さらさら。さらさら。

スレインの髪は、細くて、柔らかくて、汗で少し湿っている。疲労は色濃く残るものの、寝顔は無防備であどけない。

初めて会ったときのことを思い出す。桜の花の散る駅で。

——スレイン・トロイヤード

名前を呼ぶと、彼は笑った。控えめに。ほんの少し、恥ずかしそうに。その笑顔を見て、僕は思った。

この人を、僕はきつと好きになるだろう、って。

これまで感じたことのない、不思議な感じが胸の中に沸き起こり、多分、これが“コイ”なんだろう、と他人事のように思った。

あれが恋とするならば。

「……ねえ、起きてる？」

聞こえるのは規則的な寝息だけ。閉じた瞼に口付ける。こんなこと、恥ずかしくて彼が起きてるときにはとてもできない。

「これが、“アイ”ってやつなのかな」

教えてもらってもわからなかった。今もあまりわからない。でも。

18	7	11
16	15	1
20	16	4

いつもの計算。いつもの癖だ。

彼と過ごすうち、いつもの癖が、どんどん増える。

87	452
・	・
31	365
・	
30	87
26	

もう、一年二ヵ月と二十六日も過ぎてしまった。
恋も愛もわからない。けれど。これだけは分かる。
「……君がいなくなるのは、嫌だな」

1460	17	18
・	・	・
452	16	7
1008	1	11

あと、一〇〇八日。

Above the Aurora

コップの水面が波立った。

「ここでも、揺れるんだ」

学校のランチルーム。いつものテーブル。濡れた部分はすぐに乾き、伊奈帆はその表面を指で撫でる。

「ええ」

スレインは涼しい顔で、目の前の光学パネルを睨んで作業を続けている。ランチにはまだ手をつけていない。ヒート直後で、課題が溜まっているのだ。

「どういう現象なんだろう」

幼い頃から、伊奈帆の部屋でも発生していた振動だ。スレインと出会ってからの一年三ヶ月。発生の間隔は、日を追うごとに短くなっている。それがどうも気になった。

「地震でしょう？」

スレインが目をこちらに向ける。今更、という顔だ。

「うーん。……まあいいか」

地震発生のメカニズムはビデオで学習した。しかしどうも、理屈と現象に差異が認められるように思うのだ。そもそも地震とは、本当に教えられたとおりのものなのだろうか。確かめる手段はないし。答えの出ない問いだ。

「ねえ、ご飯にしよう？」

考えることは好きだ。答えの出ない問いも、決して嫌いじゃない。しかしそれは、今じゃなくていい気がした。

スレインが顔を上げた。じっと伊奈帆を見つめている。

「何？」

「伊奈帆って、変わっていますね」

感心した風な声はどうもひっかかる。

「馬鹿にされてる？」

スレインはくすりと笑った。

「褒めてるんですよ。そういうところ、好きだなあって」

そして、パネルをピッと閉じ、ランチを目の前に引き寄せた。

「伊奈帆で、良かったです。本当に」

蓋を開き、スレインはスプーンを口に運ぶ。咀嚼する口元を見ると、次第に落ち着かない気分になって目を逸らす。

「……反応に困るな」

伊奈帆は自分のランチの蓋をペリペリ剥がしつつ、小さくぼやく。ちらりと見ると、スレインはすぐに気づいて片目を瞑る。ウインクとか。からかわれている気がする。

「何、年上ぶってさ」

スレインは涼しい顔で顎を上げた。

「年上ですから」

「一歳だけでしょ」

「年齢差だけは、縮むことはありませんよ？」

顔が近づく。至近距離で見つめられ、言葉が急に出てこなくなる。

「……………」

「……………伊奈帆？」

はっとして咳をはらう。わざとらしいリアクションだが、こういうときには仕方がな

い。

ちらりと見ると、スレインはトレイを見下ろしスプーンを手の中で遊ばせている。食事はあまり進んでいない。なんかちょっと、いい雰囲気だ。もしかして、こちらのアクションを待っているのだろうか。

「ねえ、スレイン」

「はい」

テーブルに肘をつき、ほんの少し身を乗り出す。スレインも少しだけ重心を前に移動した。

「今度さ。電車に乗って出掛けよう」

そういえば、デートを最近していない。ヒートの間は二人で個室にこもりきりだったし、その後は課題に追われ、学校とコンパートメントの往復。たまには気晴らしが必要だろう。

「いいですね!」

ぱあっと明るい笑顔を浮かべ、スレインは同意した。

「どこに行く?」

スレインの前に、閉じたばかりの光学パネルが出現する。市街地のマップ。ところどころ、伊奈帆の見た事がない施設がある。一年の差だろうか。設定が違うらしい。

「伊奈帆と、ずっと行きたかったところがあるんです」

2Dマップに、デートの定番スポットがずらりと並ぶ。映画は前に何度か行った。後はショッピング、遊園地、水族館に動物園……。

「このとか、どうですか？」

スレインの人差し指がエリアの端っこを示す。何のアイコンもないマップの余白。伊奈帆は意味が分からず問いかける。

「何もないけど？」

「そう見えますが」

スレインは訳知り顔で微笑む。行ったことがあるのだろうか。表示されない禁止区域に。

「星は嫌いですか？」

「星が見られるの？」

スレインは頷く。挑戦的な瞳が珍しい。いい顔だな、と伊奈帆は思った。

「じゃあ、明日の放課後、寄り道しましょう」

翌日の放課後。正面の車窓の景色は真っ暗で、鏡のように僕らが映り込んでいる。

「どこまで行くの？」

電車の中で、ガラスを通して視線を送り僕は聞く。乗車時間も長すぎる。距離は既に通学時の五回分だ。

「ずっとです」

スレインも、ガラス映しに僕を見た。

「表示がないよ」

右側でくすりと声が漏れる。

「見えるものが全てではないんですよ」

こんな時に、年上っぽいことを言う。

「スレイン」

「何ですか？」

顔を横に向ける。スレインもそれに気付き僕を見た。僕を見る顔はいつもと同じのはずなのに、知らない人みたいに遠く感じる。

「一人で、来たことあるんだ？」

ガタンゴトン、と電車の音が耳の中に反響する。

スレインはしばらく僕を見ていたが、そのうちに視線を外し頷いた。

「ええ」

「ここです」

名前のない駅。終点だ。改札はなく、降りてすぐにあったのは装飾のない事務的な扉。スリープモードの生体認証パネルを、スレインは手動で起動する。

「解除できるの？」

「コツがあるんですよ」

手の平を押し付け、非認証を示す文字列とレッドランプが点滅する。スレインはパスカードを翳し、もう一度手の平を当てた。

ランプの色がブルーに変わる。シュッと軽い擦過音を立て扉が開く。真っ暗でとても狭い空間は、前と左右に合計三つの扉がある。

「心の準備はいいですか？」

「狭いから早くして」

「はいはい」

正面の扉が、ボタン操作で右へ開く。

「う、わ……」

伊奈帆は息を呑む。足元がふわふわと覚束ないのは、真上から目が離せないから。

「星だ……」

そう。星。これが星。数え切れない光の粒子。色や形が様々で、全て見たくて目が泳ぐ。

「ね。ちゃんと見られたでしょう？」

スレインが笑いながらそう言った。伊奈帆は上を見たまま頷きを繰り返す。

宇宙。これが。なんて広いんだろう。遠いんだろう。そして、綺麗なんだろう。

青緑の流線がドームの天井を横切った。

「彗星だ！」

伊奈帆は声を上げる。

「本当だ。ラッキーですね」

スレインの声も弾んでいる。

「スレイン、すごいね」

スレインはくすぐったそうに笑っていた。星明りを照り返した肌がいつもより冷たそうに見えて、伊奈帆は冷静さを取り戻す。

スレインが上を向いたので、伊奈帆も同じところを見た。星ばかり。こんなにたくさん。見ているうちに、僕たちのところと、何かが繋がっている気がした。

「これまででは、シャッターが下りていたんです」

スレインの言葉に、電車の中での会話が蘇る。

——一人で、来たことあるんだ？

——ええ。

シャッターが下りていたら、星は一つも見られない。暗闇だ。
それなのに、スレインは何度も来たんだ。ここに。

一人で。

「あ、伊奈帆。あれ」

スレインの視線の先にあったのは、大きさを増す惑星の円周。ヴェールのように透き通る光は緑。

「オーロラだ」

プラズマ粒子と大気粒子の衝突現象。説明すればそれだけだ。なのに、言葉が出てこない。波長の変化を目が追いかける。

「すごい。綺麗ですね」

スレインが小さく言った。単純な言葉が、ストンと胸の中に落ちる。

「うん。綺麗だ」

そうか。綺麗なものを見た時は、見る事しかできなくなるんだ。

伊奈帆は小さく息を漏らす。

「スレイン」

「なに？」

碧の虹彩が、オーロラ色に輝いている。

そっか。

だから、スレインといるといつも言葉が出ないんだ。

あんまり綺麗だから、見る事しかできなくて。

「あ……」

触れるだけのキスをする。柔らかくて、ひんやりとして。ほろ苦く、深い森の香りがするのは、きっと僕がアルファだからだ。同じキスでも、アルファとオメガでは、匂いや味が違うのだろうか。でも、そんなの恥ずかしくて聞けない。

宇宙を見上げる。オーロラは、秋の日の、音楽室のカーテンみたいに揺れている。あるはずのものがない。

そうかもしれない。

でも、僕らにしかないものもあるんじゃないだろうか。

暗さが増して、天井を見る。シャッターが閉じ始めていた。

「時間ですね」

スレインは、僕の手を引き梯子へ向かった。

帰り道。窓の影が白く輝く電車の中でスレインが言う。

「今日、伊奈帆のところに行っていいですか？」

僕は彼の手に触れる。自然と指が絡み合った。

車窓の景色は冬の朝。白い欠片が、桜みたいに降り落ちる。

「うん」

僕の肩に凭れ掛かる彼のうなじを覆うカラーが、照り返して白く輝いて見えた。

At that time

僕らは知っている。

僕はアルファで、スレインはオメガ。

スレインの、身体の一部のようにフィットするプロテクションカラーの下。うなじの皮膚は薄く、白く、血管が透けて見えるだろう。

頸椎には、オメガの分泌腺がある。

“その時”がくれば、カラーが外れる。

その時が来れば、僕は、そのうなじを噛むだろう。脈動するその器官を破壊し、オメガの身体を作りかえる。“繁殖”のための身体になる。僕らは本来の意味での番となり、できる限り多数の“人類”を生産する。

それが、“イナホ”と“スレイン”の生まれた意味。“その時”を迎えるのは、この僕じゃないかもしれない。今、僕というスレインではないかもしれない。

仕方がない。

僕らは、「製品」なのだ。品質を保たなければならない。

そのために、学校があり。

映画館やプラネタリウム。並木道や遊園地があり、アルファの個室には、拡張エリアと生活物資の二人分がある。アドレスをタブレットに登録すると、相手の活動記録と生体情報が見覧できる。

個別の「ページ」で教育を受ける。言語や、物理や、自然科学に、音楽を始めとする芸術科目。アルファとオメガの生殖を中心とした生物学を。

生殖可能な年齢になると、学校へ行き、「レンアイ」をする。レンアイケイケンを経たオメガは、巣作りの能力が高まり、優秀なアルファを出産する確率が上がるという特性を教えられた。

そうやって僕らは、「コイ」をする。肉体は正常に反応する。だから、このやり方で合っているんだろうと思う。

僕らは知っている。僕らが生まれた意味を。種を残すため。繁殖するため。

ちゃんと「スキ」だ。一緒にいると楽しいし、抱きしめたいしキスをしたい。うなじを噛みたいと思える。交尾だってできるし、ボンドバイトもできるだろう。僕らが「そ

の時”を迎える番であるならば。

それでいい。何の問題もない。
 だけど。

アルファとオメガは、同じ時間を生きられるわけではない。

手首のコード。製造番号は。

— Ω · ST · 18 —

— α · IK · 7 —

No. 18 と No. 7。僕らの時間はそれほど違う。

二〇歳になれば、スレインは“回収”される。僕の方は、正確には決まっていない。生殖可能年齢は、アルファの個体で差があるためだ。

卵・種の保存とボディの再生が回収。個体にとってその現象は古い言葉で“シヌ”つて事だ。プラントで、“加工”され、マトリクスで“生産”される。間隔が異なるだけ。僕もやがて回収される。でも今の僕には先の話だ。

スレインには、あと三年。それだけ。

Paradise Lost

——非常事態発生。

——エネルギーを機関部に集中。ヴァーチャルへの供給を全面カット。乗員は、
ジ内「コクーン」へ速やかに避難せよ。

揺れが収まり目を開けた。

「なんだ、これ……」

伊奈帆は呆然と呟く。教室は無機質な立方体に姿を変え、窓のない壁面に踊り狂うのは赤と黒と白。警告ランプが無軌道に点灯している。

「スレイン、大丈夫？」

「はい。伊奈帆は？」

「平気。立てる？」

赤と白のランプが消えて、緑色の円形ランプが列となって床に通路を描き出す。非常

経路だ。室内の重力制御にエラーがある。伊奈帆とスレインは、斜めに傾く身体を支え合って立ち上がる。

「……これ、どういうことだと思えます？」

もはや明白な現実をスレインが問う。これはただの確認作業。でも、言葉にして、伝えることに意味がある。伊奈帆は答える。

「ヴァーチャルだ」

スレインが頷き、再び口を開く。

「何に似せていたと思えます？」

スレインの声は落ち着いていた。

「君はどう思う？」

質問に質問で返す。僕の方が不安らしい。だって、僕らのセカイは、たった今崩壊したのだから。

「既に、失われた場所」

その場所の名前を、僕らは教えてもらわなかった。

「僕もそう思う。じゃあ、ここは何処だろう」

「それを考えるには、手掛かりが不足しています」

脳裏に浮かぶのは、いつか訪れた駅の終点。ドームを見上げた天体観測。

「今なら、これまで見えなかった場所に行けるかもしれない」

これまで教室扉があった場所に並行して、長方形の穴が四つ並んで開いている。非常通路は、そのうちの一番右だが。

「どうする？」

駅への道は、無灯の左から二番目。

「行きましょう」

スレインは迷いなく言った。伊奈帆は破顔する。

「そう言うと思った」

八百五十六。

フラットホームから教室までの歩数を伊奈帆は記憶している。方向はスレインの勘が良く、二人は駅に到着した。

「ゲートは機能していませんね」

電車も、停止しています。スレインが事実を述べる。

「線路を行こう」

速度と時間を歩数に換算しつつ、伊奈帆は線路があった場所に飛び降りた。

「マップの空白だ」

数時間後。二人は扉の前にいた。二人でオーロラを見たのが、何年も前のことのように思える。

「解除します」

スレインが手のひらを押し当てる。アラートとレッドランプ。僕が見ると、スレインは不敵に笑った。

もう一度手のひらを当て、ごん、と角を拳で叩く。おかしな音を立ててランプが切り替わり、扉は音もなく開く。

「コツがあるんですよ」

それ前も聞いたな、と伊奈帆は思い、スレインのあとに続く。

暗くて狭い場所。三つの扉の右にスレインは向いた。

「こっちです」

ボタン操作で扉が開く。またすぐ壁だ。そこにあるのは縦横を組み合わせた棒状の昇降器具。実物は初めて見たが、これは梯子だ。下へ向かって伸びている。

ここが、僕らの世界の果て。

「行きましょう」

スレインが肩越しに振り向く。伊奈帆は頷く。彼に続いて、梯子に伊奈帆は足を掛ける。暗闇の中に足を交互に踏み入れ思う。

スレインは、ここに来たことがあるのだ、と。

梯子の途中の円形の踊り場に扉がある。

「これは、伊奈帆がしてください」

意外な言葉に、伊奈帆は、え、と声を上げた。ロックは旧式の生体認証パネル。開錠

はさっきの力技だろうと想像していた。

「どうして？」

伊奈帆が聞くと、スレインは複雑な表情で微笑んだ。そしてパネルに視線を送る。

そうか。開けようとはしたのだ。でも、どうやっても開かなかった。

スレインが無理なら、僕にできるわけもないが……。

そう思いつつ、伊奈帆は解除パネルに近づく。よく見ると、さっきのロックと形が違

う。ボタンもランプもないパネルは、淡い青に発光していた。不思議な色の光だ。

手のひらを押し当てる。不思議な感覚があり、青い光が体を包む。

なんだか、懐かしい感じがする。

扉が開く。

暗い場所。数え切れないメーターが、緑の目玉のように並んでいた。

その中心。

「水槽……？」

つるりとした低い台座の上にある、球体の巨大な水槽。上部のパイプがいくつも天井に伸びていた。

水泡が発生するタンクの中には何もない。しかし、その泡を見ていると、背筋がぞわぞわする。

「スレイン」

「はい」

「今、何を考えてる？」

顔を向けると目が合った。スレインの目には、驚きも恐怖もない。ほんの少し悲しげに、彼は俯き微笑んだ。

「多分、ここは……」

顔を上げた視線の先にあるのは水槽。今は何もない。何も。しかし。照度。温度。匂い。そういうものが無意識を呼び起こす。

ここが何なのか本能的に知っている。僕は。

「ここは、僕らが“生産された”場所です」

「やっぱり、そうだよね」

アルファとオメガの再生機関。

“マトリクス”

背後で、ブウン、と音がした。

振り向くと、そこにあるのはカード型の液晶パネル。古い映像出力装置だった。起動でモニターが発光し、半透明の立体映像が出現する。

「ビデオだ」

ビデオ記録を示すデフォルメされた3Dのアイコンが、おもちゃ箱のように開かれる。映し出されたのは、電子玩具ではなく1/1スケールのヒトだ。

伊奈帆と同じ顔をしている。ただし、背丈は並んでみると胸の辺りがせいぜいだろう。年齢は十歳、いや、もっと下。

「アルバム？」

スレインが呟き、伊奈帆は首を振る。

「違う」

ネオテニーの特徴を持つ容姿。濃い茶髪に、大きな作りの赤褐色の双眸は、確かに同一だ。しかし。

「これは、僕じゃない」

十にも満たない幼いアルファのボディは、僕ではないと首を振る。

「じゃあ、これは……」

映像記録が口を開く。

——はじめまして。界塚伊奈帆。スレイン・トロイヤード。

ノイズ交じりの高い声。

「前の伊奈帆……」

彼の正体をスレインが呟く。

——ごめん。破壊できなくて。

——なんのこと？　って思うかな。僕らが生まれた、この“世界”のことだよ。今、この映像を見ているのは伊奈帆？　それともスレイン？　もしくは、漂着した惑星の知的生命体かな。僕としては、伊奈帆とスレインの二人であってほしい。だから、そのつもりで話をするよ。

高い声と、ほんの少し舌足らずな発声。しかし、口調と内容は大人びていて理知的だ。

自分の話し方によく似ている、と伊奈帆は思った。

——僕はNo.6のカイツカイナホ。年齢は七歳……、いや、八歳か。今日が誕生日なんだ。

言いながら手首の内側をこちらに向ける。—— α ・IK・6——僕よりも、一つ前の製造番号。

彼は一度言葉を止め、僕ら二人が見えるかのように順に視線を送った。

——楽園めいた今の世界を守りたいなら、ビデオをここで止めていい。五秒待つよ。

五秒間の沈黙。僕らはNo.6の言葉待つ。やがて、観念したような表情でビデオは微笑む。幼い容姿にそぐわない、諦観の眼差しがこちらを向く。

——……オーケイ。この先の話は、僕の知り得る“方舟—ノア—”の仕組みについてだ。

「ノア……」

スレインが呟く声が聞こえた。

——地球の話から、始めようか。

伊奈帆は隣を見る。スレインもこちらを見て、目が合った。複雑そうな表情をしている。それは僕も同じだろう。

チキユウって、なんだ？

——知ってる？ 地球。知らないか。僕たちの故郷だよ。今はもう、ないけれどね。太陽系第三惑星。地球。そこで生態系の頂点に達した知的生命体は人類。人。僕らのことだね。

「ヒト……」

知っているが、あまり使わない言葉だ。生命体は、ヒトしかないんだから。

——文明が惑星を蝕み、地球はヒトの住める場所ではなくなった。そして人類は、“方舟”を作った。直径一七六〇メートルの宇宙船——ノア——。僕たちの世界の全てのこと。その正体は、人類という種を未来に残すための、恒星間巨大移民船だよ。

まるで神話だ。

——僕が真実を知ったのは、四日前。その二十三日前に、スレインが“回収”されたんだ。

「回収……」

それは、僕らにとって使うに躊躇う言葉だ。小さい頃、いつか自分がそうなることを想像して眠れなかったこともある。痛いのだろうか、苦しいのだろうか。そのあと僕は、どうなってしまうのか、と。

No. 6 が大きく息を吐く。幼生の彼が一人で、こんな話を記録に残している理由を伊奈

帆は考える。

——君たち、年はいくつ？ 僕の“スレイン”はその時二十歳で、僕より十三歳年上だった。……スレインがいなくなつて、僕はあちこち捜し歩いた。回収された先を探してさ。

「それは」

——それはタブーだ。知ってる。

スレインの言葉を遮るように映像記録は首を振る。

——もう会えないなんて、絶対嫌だった。さよならだって言っていない。……そして、僕は“パンドラの箱”を開けたんだ。

「パンドラの箱？」

会話ではないのに、問いが口をついて出た。それを予期していたようにNo. 6 はこくりと頷く。

――変わり者が残した人類の真実さ。……順を追って話そうか。さっきも言ったけれど、この世界はヴァーチャルで地球を模した移民船。種の保存のため乗せられたのは、人類の亜種。アルファとオメガという希少種だ。僕を含めて一二〇組。

「二四〇人も……」

隣の声。No. 6 はくすりと笑う。スレインの驚いた表情が見えているような笑い方だった。

――多いと思うかい？ でも、人類は八十億人もいたっていうから、二四〇人ってその〇・〇〇〇〇〇〇〇三% 未満なんだよね。ゼロに近い。絶滅危惧種さ。それが今では、一組。二人だけ。つまり方舟に残っているのは僕らのペアしかないんだ。

スレインと顔を見合わせる。彼は緊張した表情で口を引き結んでいた。

——アルファとオメガについては、教育ビデオで習うよね。……実を言うと、僕はあの勉強が嫌いだった。大嫌い。スレインが隣にいたから、大人しく見ていたけどね。人類の種の残し方。アルファの特性。オメガの身体の細かな作り、習性。僕らの生命のサイクルと箱庭の仕組みについて。

それは僕らも同じだ。僕の場合、隣に誰かいたわけではないけれど。

——そういうもんだ、って。運命なんだって。そう思えたら楽だろうね。

No. 6は俯く。自分の手元を見ている。未発達な五指をじっと。

——僕の番は、新しく生産されるスレインなんだってこと。その時にちゃんと「レンアイ」して性交できるように。そのために僕に色々教えてくれてるってこと。わかった。

それが僕の生まれた意味で、僕らの役割なんだって。……でもさ。

その先の言葉と、それを言うのが怖い気持ちは、僕にはよく分かった。

——スレインは二〇歳になったら、いなくなるんだなと思うと。胸がきゅうつてして。時が止まればいいのになって思った。

隣をそっと盗み見る。スレインは瞬きもせずNo.6を見つめていた。

——そして、回収の日はやって来た。スレインは、何も言わずにいなくなった。ケージには何も無い。痕跡を何一つ残さずに、僕の前からいなくなった。……その時、僕は知ったんだ。

幼いアルファは痛々しく微笑んだ。

——これが、“スキ”ってことなのかな、って。……うん。大好きだった。きれいで、やさしくて、ちよつと口が悪くてさ。……時々寂しそうに僕を見ていた。「おやすみなさい」が最後の言葉なんて、あんまりだ。もう一度会いたくて、必死で探した。回収先のプラント——生命動力炉——を。でも、禁止区域が多くてさ。

青い光のロックパネル。スレインだけが開けられる扉があり、僕にだけ開けられる扉があった。彼はたった一人で、どうやってプラントに入り込んだのだろう。

——ヤケクソでスレインの部屋をひっくり返していた。愛読書の記録でも、使い込んだカトラリーでも、髪の毛一本でも爪の先でも、何でも良かった。なにか、スレインがいたってことを僕は確認しなかった。

ケージに限らず、全ての場所は決まった時間に自動的に清掃される。しかし、彼のしたことを無駄だと一蹴できなかった。隣のスレインが回収されれば、僕もきっと同じことをするだろうと思ったからだ。

——天井のライトの板を外した。外した、というより、破壊したただけだよ。すごい音がしたよ。そうしたら落ちてきた。何か小さな丸いもの。

伊奈帆の背筋に、悪寒にも似た何かが、ざあっと駆け上がる。喪失していた記憶が元の場所に収まるような、追想に近い感覚でNo.6の言葉を聞く。

——見つけたんだ。すごく古い、球体の生体デバイス。それが、“パンドラの箱”だった。

No.6は自身の左眼を指で示す。スレインが小さく息を呑む音が聞こえ、伊奈帆は無意識に同じ動作をしていたと気付く。

——No.0の界塚伊奈帆の遺品だよ。眼球に装着し、神経接続する生体デバイスだ。

アナリティカルエンジン。かつて“僕ら”の一部であつたものだ。

——僕はメンテナンスルームで左眼にそれを取り付けた。数百年前の骨董品でも、肉眼より、色んなものがよく見えるようになったよ。僕自身の気持ちもね。これを使ってハックして、僕はノアの全ての場所を見た。電車で何度も周回して、階段や梯子を使って。全てを終えて、僕は今この映像を撮っている。

「全てを終えた……？」

スレインが掠れた声で言うのが聞こえた。どうして僕ら二人だけしかないのか、その原因を察知したのだろうか。

——僕がしたことを話そう。僕はこの世界を、すなわちノアを壊そうとした。地球とはあまりに違う、歪められた回収と生産、“加工”と“配給”の仕組みをはつきりと知ってしまったから。

やはりそうなんだな、と僕は思った。僕らは「僕ら」の「もと」だってこと。ソフト的にも、ハード的にも。

——僕はNo. 6。スレインはNo. 17だった。四年後、僕の前に幼児のNo. 18が支給される。今度は僕が育てて、番になって、二〇歳になって、僕より先に回収される。そう。

オメガは二〇歳で回収される。アルファは、個体によるけれどそれよりずっと長生きだ。生殖可能な健康体なら、四〇歳の個体もあると教科書にあった。

——そして更に四年後。何も知らない、四歳のNo. 19が支給される。その時僕は三十歳だ。

八歳の伊奈帆は苦しそうに眉根を寄せる。

——二人。いや、悪ければそれ以上のスレインが、まるで使い捨てみたいに僕にあてが

われる。狂ってるよね。

これは惨状だ、と。番を失い、番を待つ身のアルファは言う。

——こんな惨状が、この方舟の一二〇の番で行われている。自然の摂理のように。地球とは、あまりに違う生命のルール。……耐えられない。そう思った。だから僕は、プラントに保存されている他の全ての番のデータを破壊して、生産を停止させた。現存していた百十八体のボディの機能も停止させた。

僕は重い感じで沈黙した。言葉で説明できないが、理由がなんとなく理解できたからだ。それは、あえて言葉を探すなら、生理的嫌悪に近い反射だろう。

——全て回収されたから、向こう四〇〇年くらい食料の心配はなくていいね。……ごめん。悪趣味なジョークだった。

知っていること、知っていたことなのに、吐き気がこみ上げ拳を握った。No.6は僕が見えているみたいに、気の毒そうに微笑んだ。

——ヒトゴロシだね。でも、僕が全員殺したのなら。それなら。

そうだ。それなら、どうして僕らは。

——どうして君たち。アルファアイケーとオメガエステーは生きているんだろうか？

思わず自分の手首を見る。はっとして隣を見ると、スレインも同じ動作をしていた。

手首の内側に生まれる前に彫り込まれた、僕らの型番。

アルファアイケーシックスがゆるゆると首を振る。

——僕にはできなかったからだよね。どうしてもダメだった。スレインを、僕の手で殺すことはできなかった。それがあのスレインじゃないってわかっていても、この宇宙か

ら、彼の存在を消してしまうのが僕だというのは耐えられない。回収……、死んだ人は、戻ってこないって、わかってるのにさ。

僕はスレインを見た。彼の横顔はこれまで以上に白く、暗い部屋にぼうつと浮かび上がる様がまるで亡霊のように思え、僕は目を逸らす。

——情けないことだけれど、君たちが地獄のような楽園で、今も“生かされてる”のは僕のせいだ。

今、僕は生きているのだろうか。それとも、生かされているのだろうか。生きている。生かされている。この違いを、考えたことはなかった。完全にコントロールされた生命。僕の意味や感情なんかと無関係に、アルファだというそれだけで、繁殖のために遺伝子的には同一の個体を生産し続けられている。わからない。

少なくともNo.6の伊奈帆は、自分を“生きている”と考えていた。

——ごめんね。世界を壊せなくて。僕も、*“カイシュウ”*されるよ。この録画が終わったら。

「えっ……」

スレインが声を上げた。彼にとって幼い伊奈帆は、本能的に庇護心を揺さぶられる存在なのだろう。その反応が見えたみたいにNo. 6は頷く。

——プラントではなくマトリクスで君たちを待っていたのは、僕の話をここで聞いて欲しかったからだ。僕らが死ぬ場所ではなく、僕らが生まれたこの場所で。

彼は機械の左眼に手を翳す。

——この、パンドラの箱は僕と一緒に持っていくよ。多分、どのカイヅカイナホも躊躇いなく神経接続するだろう。でも僕は、しない方がいいと思う。

僕はまさに、探そうと考えていたところだった。彼の言葉に落胆するが、彼もカイヅカイナホなのだから、こちらの思惑が見透かされるのは仕方がないと思う。その理由も、なんとなくわかる。

——狂っちゃうからさ。僕はもう狂ってる。そういう自覚はあるんだ。人間は、愛とか恋とか、そういうものに行動を左右されてしまう。もし、このデバイスを先につけていたのなら、僕はスレインが回収される前に彼を殺したと思う。

きっと、僕でもそうするのだろう。結局のところ僕ら“伊奈帆”にとつての愛や恋ってなにかというと、目の前にいる以外の他のスレインは考えられないということだ。

——独り占めしたいんだ。子どもだよ。愛してる、って気持ちさ。相手を排除することになるんだ、って分かったよ。だから、こいつは僕が連れていく。

こいつ、というのはナンバーゼロの記憶だ。最初の伊奈帆は、僕らの眼となり僕らの

身体を依り代として、ずっと死なずにノアにいたのだ。

それを装着し、道連れにするという映像記録の幼い伊奈帆が、自分の鏡のように思える。

——僕がいなくなれば、7番目のカイヅカイナホが生まれる。スレイン・トロイヤードとは、一歳差で再生される。

彼の言う7番目。アルファアイケーセブン。それが僕だ。

——そうしたら、一緒に学校に行けるかもね。いいなあ。

初めて、制服を着た日を思い出す。駅で待っていたスレインは、同じ制服を着ていた。一緒に電車に乗って、学校へ行って。並んだ机で授業を受けて、学食で話をしながらご飯を食べる。それはこの、孤独で幼い少年の。僕ではない誰かの、叶わなかった夢なのだ。

——スレインが、……僕の知っているスレインが、鳥の話をしてくれた。地球の、空を飛ぶ生き物のこと。僕はこの左眼で、それを見た。翼があつて、1 Gの空を、宙に浮いて移動するんだ。僕が見た地球の空はオレンジ色で、その中を、鳥が群れで飛んでいた。

そんなもの、僕は知らない。隣を見るとスレインと目が合い、彼は小さく首を振る。

——ビデオや学校では教えてくれない地球のことを、どうしてスレインは知っていたんだらうって、ずっと不思議だった。でも、わかったよ。

No. 6は左の臉を開閉した。そういうことなのだ。

——No. 5が話したんだ。そいつもきつと、僕と同じで左眼を交換した。

回収前のアルファアイケーファイブは自ら眼窩を抉り、形見を彼のスレインに託した。

まだ生殖可能年齢に達していないオメガエステーワンセブンに。そして彼はそれを隠した。自分のケージの天井の、埋め込みライトの板の上に。

それは、いつだったのだろうと伊奈帆は想像する。きつと、No. 6に出会ってからだ。彼を育てているうちに、No. 17のスレインはアナリティカルエンジンを簡単には見つからない場所に隠すことにした。

悲しかったのだろう。愛していたのだろう。だから、捨てずに隠したのだろう。自分がいなくなった時、見つかるならばそれでもいいと。それらの全てを、八歳の、彼の伊奈帆は知ったのだ。

——悔しいよ。僕が最初に出会いたかった。

同じ顔。同じ声。同じ特性。日に日に似てくる面差し。

……僕なら、耐えられるだろうか。わからない。よく似ていて、ほとんど同じといていいのに、思い出がないということに。喪失の痕に。

八歳の伊奈帆が微笑みを浮かべる。真っ直ぐな目で、僕らにびたりと焦点を合わせ。

悔しそうに彼は笑った。

——君が誰だか知らないけれど、伊奈帆かスレイン。その両方ならいい。君たちも、いつか本当の鳥を見られたらいいね。空は青いって音声記録にあったけれど、映像の大部分が欠けていて。僕が見た地球の空は、オレンジ色だった。

電車や教室の、窓の向こうに見えたブルー。あれは地球の空の色だったのだ。

——青い空って、綺麗だろうな。

独白のような呟きを残し、ノイズも残さずアルファアイケーシックスは消えた。

Noah falls

これまでにない大きな揺れが船を襲う。伊奈帆は、通路の壁に強かに肩を打ち付けた。スレインは足を取られ、床に膝をついている。

「立って」

手を差し出す。

「伊奈帆……」

躊躇いがちに、握られる。握り返す。

「この先に行こう」

手を引き、スレインがよろめきながら立ち上がる。唇を固く結んで、戸惑うように瞳が揺れる。初めて見る表情だった。

「……はい」

伊奈帆が手を引く。水槽を背に、梯子へ戻り、更に下へ。

この先にある、真実を確かめるために。

「……伊奈帆」

上から自分と呼ぶ声に、伊奈帆はちらりと顔を上げる。スレインの靴裏が見えた。

「何？」

カン、カン、と二人分の梯子を下りる音だけがする。

「……いえ」

スレインは小さくそう言って、そのあと何も言わなかった。

「まだ先があるけど、扉がある」

踊り場に着地し、光のパネルに伊奈帆が触る。あっけなくロックは解除され、その扉は開く。

星のパノラマがそこにあった。

まず見えたのは星。数え切れない幾千幾万の星。透過壁だ。船体の向こうのものが見えているのだ。

「プラネタリウムは、展望台だったのか……」

この場所の真上に位置する、いつかのプラネタリウムと同じ星空が前面に広がっていた。あれは、本当の宇宙だったのだ。

扉の内側へ足を踏み入れる。

「コントロールルームだ」

前面以外の壁面は全てコンピュータ。

船尾の操縦室。埋め込み式のメーター、ランプ、回路、瞬時に切り替わる数字の文字列。操縦席も操縦桿もない。

「あれが動力？」

がらんとした船室の中央部。左右に計二つの台座があり、それぞれに同じ大きさの、発光する球体があった。

「綺麗ですね……」

青白い光に肌を染め、スレインが呟く。伊奈帆は光に手を翳す。さっき、解除パネルに触れた時と同じだ。懐かしい感じがした。

「伊奈帆。あれを見て」

スレインが、壁のモニターを示す。進行方向、船首から見える映像だ。そこには、青緑の惑星が表示されている。

「あの惑星に向かってるんだ」

伊奈帆は手持ちのタブレットを操作する。何が原因かはわからないが、今では、全ての情報ロックが解除されていた。

「ノアの船体図だ」

最重要機密が簡単に見つかった。他にも気になるワードがあるが、今は船体の放射状の点滅部分をアップにする。アラート音が大きくなった。船体の左後方数か所、放射状に緊急避難のレッドランプが点灯している。損傷個所だ。原因は。

「隕石の衝突」

いつか見た彗星が脳裏を過る。

断続的な揺れは、船体の機能異常によるものだったのだ。

「あの惑星に引き寄せられているんだ」

目的地を示す航路の軌道からずれている。機関部が損傷し、推進力が落ちている。操縦はオート。船体の状態からすれば、一度着陸してしまえば、二度と他の場所に行くことは出来ない。僕らにできることは無い。

「スレイン、脱出経路を探そう」

「無駄ですよ」

伊奈帆の提案を、スレインが冷たい声で否定する。驚いて顔を向けると、スレインは伊奈帆を見据えて口を開いた。

「さっきの梯子の先が脱出経路です。しかし、脱出ポッドも、宇宙服も、既に機能を停止しています」

「そんなの、いつ調べたの？」

伊奈帆は不思議に思っていたことを聞いた。スレインは笑みを浮かべる。

「君が、入学する前に」

口元は自嘲を含んで歪んでいた。投げやりな声だ。こんな荒んだ表情も声も初めてで、驚きをもって伊奈帆はスレインを見つめる。彼は自身の手首の内側に視線を落とす。

— Ω・ST・18 —

皮膚には決して消えない黒色の、印字されたコードがある。

「死んでもいいから、どこかに逃げられないものかと思って」

俯いた横顔に絶望の翳がある。こんなことに、どうして今まで気づかなかったのだろう。いや。気付いていたのかもしれない。

電車。教室。音楽室。それらのガラスの向こうには、ヴァーチャルの空、風、木々や

花や雪があった。そちらを向いた彼の横顔を何度も僕は盗み見た。

碧の双眸は、いつだつてどこも見てはいなかった。ガラス玉のような瞳が僕らの世界を映し出す。それを虚像と知っていて。

僕は、スレインの瞳に映る世界を見るのが好きだった。揺らぎを湛える碧の虹彩。そこに映し出された世界は、本当だと信じられるような気がしたんだ。

「でも、どちらも故障していた」

逃げることも、死ぬこともできなかった、と呟く。

「そして、お前と出会った。定められた通りに」

伊奈帆は、駅で初めて会った時のスレインの笑顔を思い出し、氷で胸を抉られるような心地がした。

「……スレイン」

優しく笑って、小さく僕の名を呼んだ。その裏に、いや、心のうちに、どれほどの葛藤と諦観があったのだろうか。

「僕は、僕が嫌いだ」

強く握り締める拳に触れるのを躊躇う。許されない気がした。

せめて、言葉を。

「君が生きていて良かった」

スレインが首を振る。目を合わせずに床を見たまま彼は言う。

「アルファのお前には、わからない」

そうかもしれない、と思った。

スレインがポケットに手を入れ、何かを取り出した。

「それは？」

伊奈帆が聞く。

「だれかの形見。壊れた宇宙服の、袖の内側にあった」

銀の鎖のペンダント。古風な意匠の飾りは円形。彼の瞳と同じ色の宝石が四つ埋め込まれていた。

「お前と寝る時は外していたけれど。捨てられなくて、なんとなく持っていた」

手の中のそれを見る瞳には、怒りも憎しみも悲しみもない。感情の凜いだ透明な目。

「僕だけじゃない、って」

言葉が途切れたが、伊奈帆は何が、とは聞かなかった。決して同じ気持ちにはなれな

いけれど、その思いはわかるような気がしたからだ。

ここから逃げようとした。いや。違う。

「それに、少し救われた」

何かを掴もうとした。自由や希望と呼べる何か。そのために、箱庭を出ようとしたのだ。でも、できなかった。

「その“スレイン”は、優しかったんだろう。僕よりずっと」
きつと、“僕ら”を残していけなかったんだ。

惑星の円周が、モニター枠からはみ出す。船内の温度が急激に上昇し、船外の光景が高温で歪む。大気圏突入の空力加熱。この惑星には、大気があるのだ。

「大気圏突入に耐えられるだろうか」

スレインがくくつ、と喉で笑った。

「そういうふうに設計してある。故障は想定外だろうか」

スレインの言葉遣いが雑になって、斜に構えた態度はこれまで知らなかったもので落

ち着かない。しかし、これが素だと思ふと気が楽になり、ほんの少し嬉しかった。

「それもそうだ」

返答し、軽く頷く。スレインが意外そうに片眼を見開く。

「酸素があつて、水があつて、気温がある程度一定なら」

伊奈帆の言葉に、スレインがシニカルな表情で肩を竦める。

「そんな奇跡、起こるわけない」

そして視線を船の外へ。星明りを受けた横顔に感情の色はない。隕石の衝突箇所からノアの外装が次々剥がれ、無数の流星となり地表に燃えて落ちていく。

「このまま、燃え尽きる可能性の方が高いな」

スレインの声は学食で雑談していた時のような平生そのもので、伊奈帆はたまらない気持ちになる。

船内の空気は熱気で歪み、肺の焼けそうな高温だ。

「それでも」

炎を照り返す船内で、唯一赤に染まらず青白く光る球体。伊奈帆はスレインの腕を引き、青い光へ走り寄る。

「……伊奈帆？」

他の場所より、明らかに温度が低い。二つの台座の間に膝をつき、体重を掛けて腕を引く。スレインはバランスを崩し倒れ込み、伊奈帆はその上に覆いかぶさり背中を曲げた。

「何の真似です、どいてください」

肩を押され、脚を蹴られる。

「だめだ。君を守りたい」

馬鹿な、と舌打ちが返る。目が合い、すぐに逸らされる。

「船が落ちたら意味ないでしょう。二人とも木っ端微塵ですよ」

敬語に戻っている。どっちが素だろう。多分、両方。

「そうかもしれない」

全部本場で、全部本物だ。二人で過ごした箱庭の日々は、作り物だが全てが嘘だったわけじゃない。

「でも、君を放っておけない」

見開かれた目。炎の色と青い光を受ける瞳は、いつか二人で見たオーロラのようなだっ

た。

凄まじい振動が船を伝う。一方の台座の脚を力いっぱい両手で掴むが、高温で皮が剥けて血で滑る。

水ぶくれのできた手に、スレインの手が重なった。

「……伊奈帆」

互いの姿が瞳に映り込む距離で、ようやく聞き取れるくらいの声が名前を呼んだ。

「うん」

轟音が船を包む。炎が壁を歪ませる。顔を上げられない。青白い光の中から出てしまつたら、この身体は機能を停止するだろう。

もう、見えるものは互いの目だけ。

「……ウミは、あるでしょうか」

「きつとあるよ。地表が青っぽい」

眼が細く弧を描く。瞳に薄く膜が張った。揺れる瞳の虹彩に、罅割れたガラスのような模様が見える。

足が燃えているようだ。背中も。髪も。手のひらには感覚がない。

「……ねえ、伊奈帆」

「なに？」

手の甲を包む、スレインの手に力が籠る。それが嬉しい。

プロテクションカラーのランプが、制服の生地を透かして見える。
赤の点滅。

「トリは、いるかな」

1Gの空を飛ぶ、ツバサを持った生き物。

地球からワープを繰り返して漂着する、何光年も離れた別の銀河の惑星に。

そんなの、いるわけではない。

でも。

伊奈帆ははにかむように笑った。

「きつというよ」

笑ったのは、自分の言葉に。こんなのは僕らしくない。だけど、もしも最後の言葉になるのなら、希望を君には伝えたい。

スレインの声は聞こえない。でも、笑ったように見えた。

揺れと音で何も見えず、何も聞こえなくなる。台座を握り寄せ合った身体の、手の甲だけが、僕が今、一人じゃないという手がかり。

焦点が定まらず、見失う。顔が見たい。目が見たい。オーロラを閉じこめたようなその瞳に、僕を映していてほしい。

ああ、鳥だ。

白い鳥の幻影が、開いた瞼の裏を行く。海鳥の群れが翼を夕日に赤く染め。それは様々な形を変え、最後は白い機体となり、星の中を彗星のように駆け抜け消える。

「そこではきつと、……ウミネコが、青い空を飛んでいる」

聞こえているかはわからない。聞こえていればいいと思う。

十九回目。

二ヶ月に一度の割合は、僕には多すぎるように思う。決して慣れることは無いのだから。いつだって、これで終わりがかもしれない、と。そう思つて、ここに来る。古びた壁と、消えない染みで薄汚れた床。雨の高窓に光源はなく、湿った空気の室内は、薬品の臭いが充満している。

日常からもっとも遠い、地球連合軍極秘施設最奥の独房。

伊奈帆は椅子を引き寄せて、真白いシーツのパイプベッドに目をやる。点滴のチューブがつながっている前腕は、浮き出た血管が模様のように皮膚を這う。包帯とガーゼに包まれた部分は首と頬。かけ布の下腹部と左腿。それはカルテを見て知った。

死人のような顔色だ。目の下の隈は濃く蒼く、瞼には静脈の細い線が透けている。削げた頬に落ちる影を、痛々しい心地で眺める。

十九回目の暴行の痕。

極秘施設の人員が、これでまた入れ替わる。異動理由は捕虜虐待。今回は三人。前回
は二人。その前は五人で、その前は四人。それより以前も含めると、初期配置から残っ
ているのは管理部の三人だけで、九割以上がいなくなった。

オメガのヒートには抗えない。誘引フェロモンは壁を越えて分散する。

隔絶された場所に秘密裏に収容されたのがオメガだった、というのは。それが大罪人
の戦犯であり、既に処刑された人間なのだという事態は。場所と人との巡り合わせが悪
すぎたのだ。

さらに悪いのは、利害も損得も関与しない第三者的な立場から彼の処遇に携わる唯一
の人間が、アルファだったということ。

スレインの性別がオメガだった、というのも驚きだが、僕自身がアルファだった、と
知った時は複雑だった。

スレインには抑制剤も避妊薬も投与されているけれど、そんなものに関係なく、ヒー
トの度に誘引されたベータ達の歯止めのない暴力にさらされる。囚人である彼には逃げ
る場所も、抗う手段も残されていない。

そのことがわかっているのに、僕はいつも事態を止められない。発情期のオメガを前

に、誰よりも影響を受けてしまうと予測されているからだ。アルファには抑制剤が存在しない。スレインのヒートの兆候が認められれば、僕は施設への立ち入りを禁止され、自宅にも帰れず軍の機関に隔離される。

特別なんて望んでいない。

ただ、僕は――。

「……う」

見下ろす瞼がぴくりと震えた。ゆっくりと開く目の色が、冬の湖面のように揺れている。

「やあ。おはよう」

スレインは瞬きを繰り返し、やがて状況を理解したらしく、視線を逸らし、口を開く。

「……おはよう」

がさがさの掠れ声でも、返事が返ってくるのが嬉しい。生きていてくれて良かった、と改めて思う。向こうは、そう思っていないかもしれないけれど。

彼にとつての生が責め苦とは、僕は知っていたはずだ。わかった上で、彼が生きることを望んだ。でも、こんな形じゃない。自由を奪われ、未来を奪われ、残酷な数の暴力

に曝される。これじゃあ、それまでの彼の不幸と何も変わらないじゃないか。

罪を背負って生きていい。でも、それを裁くのは人であってはならないと思う。

そんなこと、今更僕が言えるのか？ 言えるわけがない。

「お水飲む？」

思考を切り替え、伊奈帆は聞く。背後にある、デスクの水差しに視線を送った。

「うん」

スレインは素直に頷いた。伊奈帆は立ち上がって水差しを取り、彼の口元へ運んでやる。

「自分でする」

注ぎ口を手で払い、スレインは肘をついて起き上がろうとした。が、途中で顔を顰め動きが止まる。

「起きられる？」

「平気だ」

間髪入れずに答えが返る。しかし動きは止まったままだ。伊奈帆は何も言わず水差しを置き、彼の背中を左手で支える。半身を起こし、腰の位置に枕をあてがう。咳き込ん

だので背中を擦ると、スレインが伊奈帆に顔を向けた。

「罪悪感でも、感じているのか？」

肩で息をしながら、途切れ途切れに言われた言葉は刃物のようで、一瞬たじろぐ。伊奈帆は問いの答えの言葉を探し、口にする。

「僕には、責任がある」

「はっ」

乾いた嫌な笑い方。スレインが身動きし、伊奈帆の前で片手を振る。

「そういうの、反吐が出る」

吐き捨てるようにそう言って、スレインは壁の方に顔を向けた。伊奈帆の位置から、包帯に覆われた首の後ろ側が見える。

フェロモンの分泌腺があるオメガのうなじ。アルファにのみ感知できる程度に僅か、ヒートの残り香が燻っている。そこを見ぬよう目を逸らし、伊奈帆は自明な正の因数以外にそれを持たない数の並びを四〇個数え、次に壁の凹みの数を、そして床の染みを数える。

「……どこを見てる？」

「壁と床」

「言いたいことがあるなら言え」

言いたいこと。

伊奈帆はスレインを見る。膝の上で自分の拳を強く握る。

どうして、傷を。

私刑を。被虐を。理不尽を。

受け入れてしまっんだ、と。

抵抗したら、もっと酷いことになるかもしれない。

けれど、抗ってほしい。

これ以上、傷ついてほしくない。

言いたいことは、たくさんある。でもどれも言葉に変えられない。

僕に言えるか？ 言えやしない。

彼の誇りも未来も。救いとしての死の自由も。世界も。空も。

奪ったのは僕だ。

「……なんだ？」

怪訝な目で、スレインが伊奈帆の手と顔を交互に見る。その視線を受け、伊奈帆は初めて自身の行動に気付く。

手の平が触れていたのは青褪めた頬。頬骨の硬い感触がある。乾いていて冷たいが、生きた人の肌だった。

「……ちゃんと生きてるか、確かめたくて」

スレインはしばらくじっと伊奈帆の手を見ていたが、やがてその手に自身の手を重ねた。雑な動きで手の甲を持ち、それを胸の左側へ。

とくん、とくん、と微かな振動が伝わる。大きく開いた襟から露わな胸骨の窪みを打つ鼓動。陶器のように血の気が無く、古傷の引き攣りが白く浮き上がる肌の上に、ペンドントの銀の鎖が音もなく揺れた。

「ほら、気が済んだか？」

呆れ半分の軽い声音でスレインが聞く。素っ気ない素振りだが、優しい声だ。その声を聞きながら、傷の無い場所が、この身体にまだあるだろうか、と考える。

消えない傷は。

それは、いつから。

誰に。

どうして。

後悔にも似た、暗い思考に沈んでゆく。

地球のヘブンズ・フォール世代は、多くが家族や故国を失って、苦しい暮らしを強いられてきた。伊奈帆自身も両親はなく、生まれた家も父と母の顔も知らない。施設で悪辣な仕打ちを受けることもあったし、追い出されてからの暮らし向きは決して豊かではなかった。それでも、それなりにやってきた。孤独を感じることはあっても、深刻な不幸を知らずに生きてきた。伊奈帆には姉がいたし、幼馴染も友だちもいた。学校に通え、勉強や訓練を含む学校生活は楽しかった。でも、そこに。

例えば、通学のバスに。

兵科教練の見学席に。

たまにしか行かない購買に。

雨の日の靴箱に。

同じ、クラスに。

そういう、とりとめのない日常に。

スレイン。

君もいたら良かった、なんて。夢みたいなことを、考えてしまう僕がいる。

「……君の手。冷たいね」

何を言っているのか分からず、伊奈帆はスレインの手を握る。痛々しく血管の浮き出た、痩せて骨張った左手。爪の先は二枚爪でぼろぼろで、爪の間にこびりついた血がある。

この手を掴んだ。そのことに悔いはない。しかし、時折思うのだ。

こんな生が許されるのか、と。

「……どうして、お前が」

かすれた声は戸惑いを含み、膜を隔てたように遠く聞こえた。伊奈帆は顔を上げる。目が合うと、スレインは困ったように眉尻を下げ、視線を左に泳がせた。

「どうして、……お前が、そんな顔をするんだ？」

「……え？」

躊躇いがちに握り返す細い指。乾いて割れた唇が、一度開いてそっと閉じ、再び小さく細く開く。

「僕よりずっと、痛そうだ」

僕に告げるその表情も、僕には痛みを耐えているように見える。

二人きりの独房は、薬品のおいと静けさに満ちている。雨の光度で頬や瞼に浮かぶ影の濃さに気づく。握る手に力が籠る。

「……だってさ」

伊奈帆は言葉を探し、唇を噛む。どうして痛みを感じるのか。心の内の、その理由を追いかける。そして掴む。正しくも、綺麗でも、清らかでもない痛みの理由。

「僕は、君だったかもしれない」

勝者と敗者。英雄と罪人。持つ者と待たざる者。

「君は、僕だったかも」

それは、ひっくり返っていたかもしれない。これからひっくり返るかもしれない。テーブルの上で回転する、同じコインの表と裏のように。

正しいものが勝つのではない。負けた正義が悪になる。それが戦争だ。

握る手の、ところどころに傷があり、胼胝があり、色の変った部分がある。この手が操る機体は何より速く、誰より先へと飛んでいた。

「許せないんだ。君が過剰な罪を背負わされ、何もかも失って、今も奪われ続けているのが」

その先を望むものは、確かにいたのだ。そういう人々にとってのスレインが——スレイン・ザーツバルム・トロイヤードが象徴するもの。それは未来だった。希望だった。自由への美しい夢だった。

「それを、見ていることしかできないことが」

そんな男を、翼を挽いで檻に閉じ込め、手足を縛り、歪んだ欲望の捌け口になっている。謝ることすらできない。そんなことをして、これ以上誇りを奪うことは許されない。なら。

「……僕を殺すか？」

ゆるやかに手が解かれ、スレインが腹の近くで自身の両手の指を組む。

「それとも、逃げるか。お前ひとり」

言葉とは裏腹に、その目が語る。それでもいいと。

逃げてしまえ。捨ててしまえ。無かったことにしてしまえ。

「お前には、ここ以外の場所がある」

伊奈帆はスレインの腕を掴む。喉から言葉を絞り出す。

「嫌だ」

スレインが痛みに眉を顰め、囁くように問いかける。

「殺すことが？ それとも、逃げるものが？」

「全部だよ」

なんて細い腕だろう。こんなになるまで、僕は。

僕は、何をしていた？

雨の大气で湿った空気に、ここから見えない空を思う。鼻につくオキシドール。この
おいに、僕はすっかり慣れてしまった。

「……僕は」

伊奈帆はスレインを見つめた。視線が交錯し、碧の瞳が大きく見開く。映り込んだ自
分の顔はまるで自分じゃないみたいだ。

「……君を」

腕を握る手を緩め、肩へ、鎖骨へ、そして首へ。包帯止めを外し、幾重にも巻き付く
包帯を解く。蛇のような白い布が、シャツの上に蜷局を巻く。

暴力の跡がはつきり残る首。

首筋に、ドクドクと、血流が伝わる。

首の後ろに手の平を当てる。傷でざらつく素肌の感触。頸椎の位置を、上から順に一つ一つ確かめる。人差し指の爪がその場所で留まる。他の場所より僅かに固く盛り上がった、しこりのような首の部分。爪の先を縦に当てる。皮膚に押し戻される感覚がある。心が決まる。言葉が決まる。

「君と、生きたいんだ」

額が触れ合い、鼻があたる。伊奈帆は目を閉じ、彼の細く華奢な首の後ろで両手を重ねる。祈りにも似た手の形で。

スレインの手が、伊奈帆のこめかみを撫でる。髪の間を探り、毛髪の途切れた銃創に、指の先が優しく触れた。

「……殺し損ねたのは、僕が先だ」

重なった唇は笑みの形。消毒液のにおいと苦い味がした。鼓動を知りたくて胸を重ねる。

「だから、いい。お前がそう決めたのなら」

耳の後ろで声をした。肩口に乘せた顎。すぐ右に、両手で覆う首がある。スレインの手が伊奈帆の組んだ指を外していく。痣や瘡蓋のまだらに残る白いうなじが晒される。

「生きるよ。……お前と」

約束する。だから、と。震える指が項垂れる首の髪を分ける。

「お前が、噛め」

Planet of Rain

細かな雫が無数に降る。

これは“アメ”だ。

伊奈帆は目を覚ます。体中が濡れている。ざらざらとした細かな粒子がへばりついていて、それは地表を覆う“スナ”だ

「……。ここ、は……」

髪をかき上げ、周囲を見渡す。地表部分の面積は少ない。あたりは一面の水。不思議な音が鳴りやまない。それは“ナミ”の音と知る。

これが。海。本当の海だ。

背後に足音。そうだ。彼は。

「スレイン！」

立ち上がり、振り向く。数歩のところにスレインがいた。彼は立ち止まり、それ以上進まない。

どうしたのだろう。

「スレイン？」

名前を呼ぶが、返答も反応もない。右側に重心を預けた姿勢で、こちらに顔を向けている。制服はところどころ焦げて穴が開いていた。そして、もうあの首輪はなかった。身体の一部のように頸椎を覆っていたプロテクションカラー。今、剥き出しの首には、細い鎖の輪が垂れ下がっている。先端の飾りが風に揺れ、青白い首が外気に粟立ち、鎖は鈍色に光った。船内でのスレインの言葉が蘇る。

——だれかの形見。

その誰かは、どうして、これを残したのだろう。脱出ポッドの宇宙服の手の中に。伊奈帆は目を伏せ、再びスレインを見上げる。彼は感情の欠落したような顔でこちらをぼんやり見つめていた。

ペンダントを残した誰かの思惑は、知る由もない。しかし伊奈帆は思う。これは勝手な願望にすぎないけれど。

その誰かは、エデンの外を望んだのだ。運命を拒み、未来を掴もうと藻掻いた誰か。一人ではない。そしてその試みは、悉く敗れ去ったに違いない。

いわばそれは、人の愚かさの証だ。
その末裔が、僕らなのだ。

「……スレイン」

もう一度名前を呼ぶと、彼はびっくりと体を大きく震わせた。その足が砂を蹴る。肩を掴む手。腹を膝で強く押され、背中が地面にぶつかる。顔を上げる間もなく、首に強い圧迫を感じた。ぎりぎりと、十の指が蛇の群れのように巻き付く。呼吸が止まり、見上げる顔が次第にぼやける。

これが最後なら、笑ってほしいな、と狭まる視野にふと思う。

「……どうして？」

ほんの少し、氣道が開く。視界が徐々にクリアになり、見下ろす顔が薄っすら見えた。ぼたぼたと、額に雫が落ちてきた。

「僕は、お前を殺そうとしているんだぞ」

泣いている？ いや、雨だ。碧の瞳は乾いていた。

「……そんなの、見れば、わかるよ」

「なら、どうして笑う？」

「え？」

確かに、僕は笑っていた。

「さっきまで、あんなに、抗ったのに。……死ぬことに僕を庇ってまで、と。消え入りそうな声は掠れている。」

「どうしてかな……」

今、抵抗しない理由は。

「……でも、君がそうするなら。仕方がないと思ったんだ」
スレインが眉根を寄せる。

「どういう……」

伊奈帆は微笑んだまま口を開く。

「だって、僕しかないでしょ」

——君が復讐する相手は。

「……復讐？」

聞き返すスレインを、伊奈帆は見上げる。

「スレイン・トロイヤードは……」

首を絞める彼の両手に手で触れる。外すためではなく、指で見るため。ただ、触れるため。右の手首の内側の。

— Ω・ST・18 —

十八人の、全てのスレインは。

「全てを奪われ続けた。自由も、命も、未来も、……死さえも」
どうしてか。簡単だ。

「僕」がいたからだ。番となって、遺伝子を組み替えてしまった僕が。

「奪ったのは僕だ。君がオメガで、僕がアルファだから。番だから。ノアの中で、ずっと君は犯され、奪われ、殺され続けてきた」

方舟に乗り、箱庭でずっと。君は。

それは。

「僕と出会ってしまったから」

君のうなじを噛んだのは、遠い昔の僕であつたはずなんだ。

「だから、伊奈帆である僕がその落とし前をつけるのは当然だと思う」

雨の雫が金の髪から僕の額に滴り落ちる。ぽた、ぽた、と。

スレインが、ふっ、とため息のような笑いを漏らした。

「贖罪のつもりか」

「おこがましいことだけれどね。多分、そう」

伊奈帆は両腕を肩の高さに上げ降伏を示す。

「殺していい。僕はそれを望んでいる」

「……卑怯だ」

首から彼の両手が外れ、地面の砂に指が埋まる。

「お前がいなくなったら、……僕はどうすればいい？」

「自由になれるよ。僕から」

雨の岸辺で砂にまみれて向かい合う。

「……自由なんていらぬ」

スレインの声。彼は伊奈帆の上で体を起こし、海を見た。

「僕は……。僕、は。未来なんて必要ない」

雨が降る。さあさあと、細く無数の雨が降る。僕らの身体に、もう濡れていない所はどこもない。手も、足も、胸も首も、髪も、顔も。

見上げるのは、濡れそぼった白い頬。見開いた碧眼。青褪め隈の濃い頬を、幾筋も雫が伝い落ちる。

その雫のどれかはきつと涙なんだ。

「……二〇年」

伊奈帆、とスレインが名を呼ぶ。雨の響きによく似た声で。

「二〇年だけ。それだけを生きる。伊奈帆。お前を好きになるためだけに」

水と空気の楽園。そこに至る奇跡の時をただ待つ。長い、長い、運命の輪のその先に、次のオメガを繋ぐため。

「それが、僕が生きる意味だって」

いつか辿り着く楽園で、子を産め。育てろ。その時がまだ先ならば、機能の維持に努めよと。

恋をすること。交尾をすること。繁殖すること。そこに“アイ”などなくていい。それが使命なのだ、と。

「そうやって、教えられてきたんだから」

伊奈帆は身体を起こした。スレインの肩に両手を乗せる。

「だから、君は逃げようとしたの？」

スレインは頷く。

「それは、僕から？」

どんな気持ちだったのだろう、と伊奈帆は考える。脱出ポッドが壊れていたと知った時。誰かの形見のペンダントを見つけた時。僕に初めて会った時。

僕という時、どうして君は笑えたんだろう。

僕は、君がいたから笑えたのに。

君は、そうじゃなかった？

「……違う。伊奈帆」

苦しそうにスレインの顔が歪む。

「お前だったから、僕は逃げるのをやめられた」

消え入りそうな声は、次第に大きくなる。

「お前だったから、ちゃんと好きになれた。僕は……。ああ、僕は、だから、それで良

かった。それだけでよかったんだ。学校に行って、映画に行って、お前のケージに二人きりで閉じこもって。あんな風に、あと二年と四か月、幸せに生きて、死にたかった」

二十一年目。二十二年目。二十三年目の。

「その先の、未来の生き方なんて知らない」

濡れた頬を火傷で爛れた手で拭う。

「僕は、君が好きだよ」

「……やめてくれ！」

裏返った声は悲鳴だ。スレインが激しく首を振る。

「僕にはもうわからないんだ……！」

拭っても、拭っても、濡れた頬に伝う雫。そのどれもが雨に見え、そのどれもが涙に見えた。

「お前のことが好きだった……！ でも、もうわからない……」

しゃがれた声。三度の咳。

「伊奈帆。僕は、お前を許せない……！」

雨が落ちる。

「お前を憎んでいるのかもしれない。……だけど、お前を殺せない」
涙が零れる。

「お前といると、幸せだった。けれど、そんな僕が、僕はずっと嫌いだった」
首を振る。

「お前が好きなら、……お前を愛しているのなら、どうしても僕はお前のことを許せない？」

声が枯れる。

「お前は、何も悪くないじゃないか……！」

濡れそぼった、苦悶に満ちたその顔で。

「お前のせいじゃない。お前は何も悪くない……。なのに、もう僕は、今までみたいに笑えない。……僕は、おかしいか？」

涙を流しながら笑う。

二人の間には、雨と、大気と、白い吐息だけがある。

「……君がおかしいかどうかなんて、僕には大差のないことだ」
雨に濡れた彼の頭髮は、紺色の空に彩度を失い銀色に見えた。

「何が本物か。僕が本物か。君が本物か。そんなの、わかんないよ」

海に沈みゆく方舟が爆炎を上げる。

「さっき、君に撃たれることを望んでいと言ったけれど」

炎の色が、雨の線を赤くする。

「あれは嘘だ」

赤い光の照り返し。濡れた頬を両手で包む。

「君と生きたい。僕は」

冷たく、強張った頬に思う。この雫のどれが涙だとしても、それを止めることは僕にはできない。それでも、何度だって拭い取ろう。君の涙が止まるまで。

「僕が、生きたいんだ」

雨の降りしきる惑星で。僕たちの生命は、波紋のように刹那に消えてしまうとしても。

「君がいれば、僕が生きていける」

隣り合った雨の一雫でいたい。流れることを止められずとも、隣で涙に気づきたい。

「もう少しだけ、生きてみない？ 僕と。殺したいときに殺してもいい」
だから。

「ねえ、スレイン」

震える白い手に触れる。包むように。僕を殺せなかったこの手は、今は何もない。空っぽだ。僕だって、ずっとそうだった。空っぽだった。……だけど。

「諦めないで。生きることを」

僕は見つけた。離れたくないものを。満たされた手。満たしてくれた。君の手が。そして君には。

今に続く未来を。その手に掴んでほしいと思う。

「……伊奈帆」

スレインの顔の右半分に光が差した。伊奈帆は思わず海を見る。水平線の遥か彼方が白く光る。

「スレイン。見て」

雨は降り続けている。その雨の一部の色が変わった。糸のように細い雨の百億千億の一線が、紫に。藍色に。青に、緑に、黄色。橙そして、赤のグラデーションを描く。

「虹の雨だ」

雲も虹色。海面の波紋の色は、舞い散る桜や秋の落葉、雪が降り積もったように光る。

「……綺麗だ」

スレインの声。

「うん。綺麗だ」

伊奈帆は波に思い出を重ねて頷く。

「こんな世界が、見られるなんてね」

スレインを見ると、横顔が空を見つめていた。瞳は虹色に輝いて、その色に伊奈帆は、二人で見たオーロラを思い出す。本当の宇宙がそこにあり、ここはその時、宇宙のどこかに確かにあった場所なのだ。

「スレイン」

「……なに？」

手を取り合って立ち上がる。よろける肩を僕が支える。薄い肩。雨に濡れて冷えていて、雨の雫が鎖骨に留まり虹の光に揺れている。

僕を見返す濡れた瞳。雨か、涙か、わからない。どちらであつても、とても綺麗だ。生きていて良かった、って。こんなに簡単に思えるんだ。

「僕と生きて」

虹を閉じこめた一滴が、右の瞳からこぼれ落ちて頬を伝う。

腕を引く。雨に濡れた髪も頬も虹色だ。その頬にキスをする。虹の雫は少ししよっぱい。

「……僕で、いいのか？」

僕は自分の右手を見る。生涯消えないナンバリング。人類の繁殖のためにデザインされた製品である証。

— α・IK・7 —

真実の一端を知った今では、原罪の烙印のようにも思える数字。けれど。だからこそ出会えた。僕たちは。

「君しかないよ」

濡れた冷たい手を握る。エデンの果てにあったのは、虹の雨が降る天地。鳥の姿は見えないけれど、それでもいいと僕は思う。運命に抗い守りを託した誰かから、自由への祈りを受け取った人。

ケージの外へ飛ぼうと願う、鳥のような人がここにいる。

「……うん。僕もだ」

スレインは呆れたような笑顔を見せた。

「お前しかない」

憎むのも。愛するのも。

「行こう」

「ああ」

握る手が、僕の手を握り返す。その手を虹の雨が濡らす。顔を見合わせ、僕らは笑って目を閉じる。雨の味は甘くて、少しだけ苦い。

この場所で。虹の中で。鳥のように生きていこう。

イメージソング

月曜日／無菌室

月曜日消失

People in The Box

アメノヒニキク

RADWIMPS

空と青

[Alexandros]

「Ω・ST・17」

僕の身体は、こんなにも騒々しいものだったのか。

オーバーサイズの宇宙服の内側に聞こえるのは、鼓動と呼吸と幻聴だ。煩い。煩い。煩い。もう何も見たくない。何も、聞きたくないのに。

少年は激しい頭痛を感じ両手で側頭部を押さえる。ヘルメット越しで、手は頭蓋に届かない。

楽になれると思ったのに。ここまで、簡単だったのに。

意識を失いそうになりながら、自分以外の声を聞く。

それは産声。

「あ……」

背中が弓のように引き攣る。初めて感じる衝撃に、彼は歯を食いしばる。その時感じたものは諦めと絶望と、そして。

確かな歓喜だった。

生まれた。……ああ。僕がもたもたしていたせいで。産声を聞いてしまった。そんな

に泣くな。お願いだから。……お願いだから、このまま宇宙で死なせてくれと。そう思うのに。

「……馬鹿だな、僕も」

彼はポッドの設定を戻し、宇宙服のヘルメットを外した。くすんだ金髪が無重力で上に靡く。閉じたゲートの先にある宇宙を透かすように目を細め、彼は微笑む。

もうだめだ。生まれてしまった。

聞いてしまった。

……置いていけない。『彼』には、僕しかないのだから。

「伊奈帆。言ってた通りだ。……今、貴方が生まれたよ」

宇宙服のパーツをゆるめ、体を抜く。右腕を抜いた後、彼は自分の手首を見る。

——Ω・ST・17——

人差し指が、数字の部分の別の数字の形になぞる。

「貴方も、こんな気持ちだったのか？」

“僕”が生まれた時。貴方はもう成体で、今の僕よりもっとずっと年上だった。だから、時々僕の向こうを見てたんだ」

僕が年を重ねるごとに、僕の横顔をそっと見つめるようになっていた。

「回収された『スレイン』を、僕を通して思い出していたんだろう？」

いたはずだ。No. 16 が。その面影を僕に探していた。いや、知らずに見つけてしまっていたのか。

「気付いていないと思ったか？ それくらいわかるさ」

愛していたのだ。誰よりも。……僕よりも。

「……悔しいな」

同じ顔で。同じ声で。なのに、僕ではない誰か。

「二人だけなら、良かったのに」

貴方と二人。箱庭で。

「伊奈帆……」

勉強して、ご飯を食べて、時々どこかに出かけて行って。

地球の話や、鳥の話。雨の話をしてくれた。

ケージは別々だったけれど。一緒にいた時、僕が今みたいな成体なら、同じケージで眠ることもできただろう。

悔しい。

悔しいな。

悔しいけれど、幸せだった。

幸せは、突然終わった。

貴方は形見を僕に残して行ってしまった。

縋りつく腕を優しく抱いて、その後、静かに外した。

施錠されたケージの向こうで、きつと貴方は振り返りもせず行ってしまった。扉を叩く音が、聞こえなかったはずがないのに。

どうして。

そんなの、決まってる。

……きつと、会いに行つたのだ。彼の“スレイン”に。

「僕も、貴方に会いに行きたい」

しかし今。新しい番が生まれた。産声を聞いた。

「僕は、行けない」

営みは繰り返される。人類が、遥か彼方の楽園へ降り立つまで。

それが何光年先か、何世代先かはわからない。それまで、このシステムが破綻せず続くのかさえ。

でも。

いつか、終わりを望む個体が現れるかもしれない。

宿命を断ち切り、全てを捨てて、人類なんか滅んでしまえと願うものが。

脱ぎさったスペーススーツを見下ろして、形見を胸ポケットから取り出す。球体のデバイス。捨てろと言われた。だから、形見が欲しいと彼に言った。一秒でもいい。まだ、一緒にいたかったから。そうしたら伊奈帆は、『これは僕にとっても形見なんだが、君の方がふさわしいかもしれない』と、首の後ろに両手を回した。

「前の番の形見なんか、もらって嬉しいわけがないだろう」

結局捨てられなかった伊奈帆の眼に、彼の眼差しを重ねる。

本当は、何もいらなかったのに。貴方と一緒に死んでもよかったのに。

彼は番の形見のもう一つであった首飾りを首から外す。そして、右側に腕を差し込みグローブにグッと押し込んだ。

前にもいたんだ、お前のように、と。未来へと心を残す。捨ててしまえ、人類など。

行ってしまえ、どこへなりと。

空を望む鳥のように。

僕にはできなかったけれど。できれば、二人で。

「お守りだ」

笑みを湛える口元が、自身の名前を唇に乗せる。

「お前は、うまくやれよ」

守りを残し、思い出を手を。彼はケージへ向かって歩き出す。

一羽目の鳩は、方舟に戻ってきた。

二羽目の鳩は、嘴にオリーブの葉を咥えて戻ってきた。

三羽目の鳩は、とうとう戻ってこなかった。

用語集

・ノア……通称方舟。人類種の保存を目的とする恒星間巨大移民船。直径一七六〇m。
・ノアズ・クロウ……方舟の乗組員で、番ではないもの。性別はベータのみ。構成員は軍人、科学者、技師、医者など。繁殖目的の乗船員ではないため、一世代で絶滅している。

・箱庭……居住区のこと。

・ケージ……アルファ、オメガの個室。コンパートメントは俗称。

・コクーン……小型シエルターのこと。各ケージの床下であり、緊急時に露出する。一人分のスペースで、コールドモードを備えている。

・マップ……各人のパスカードで閲覧できる箱庭の地図。立ち入り禁止区域は非表示。
・アドレス……パスカードに記録されている個人情報。アドレスを交換すると、ケージの番号、通信可能なチャンネルをはじめ、各自の生体情報や、カラーにより秒単位で更新されるオメガの体調記録が閲覧できる。

- ・メンテナンஸ்ルーム……医務室のこと。外科的手術も可能。アルファ、オメガの生後四年間の保育室でもある。
- ・エッグルーム……メンテナンஸ்ルーム内にある保育室のこと。一二〇体まで同時に保育可能。
- ・コントロールルーム……操縦室。第二次惑星間戦争後、地球連合軍がカタフラクトから回収したアルドノアドライブD (Deucalion) とアルドノアドライブT (Tarsis) の二基が動力源として設置されている。
- ・プラント……生体動力炉。回収↓加工↓支給のサイクルを担う。寿命に達した個体が回収される場所。生殖器官はマトリクスへ送られる。
- ・マトリクス……アルファ、オメガの再生機関。回収した個体のナンバーを更新し、クローン体を再生する。コールドポッドには生殖器官が保存されている。
- ・コード……アルファ、オメガの右手首に印字された製造番号。オリジナルのナンバーは0。
- ・ボデイ……アルファ、オメガのトルソーのこと。
- ・クレイドル……オメガの生殖器官のこと。ノアの最重要貨物であり、満二〇歳のオメ

ガから摘出され、マトリクスに冷凍保存される。製品に不具合がある場合は、ストックから移植される。

・カラー……オメガが生殖可能年齢に達すると頸部に装着するプロテクター。伸縮性のある形状記憶セラミック製で、個体のサイズ、肌や質感に合わせてそれぞれデザインされている。オメガの状態を示す正三角形のブルーランプが前後にある。平常状態は点灯。興奮状態は点滅。生命活動が危険な状態になると、黄色から赤色に点滅する。

・教育ビデオ……ケージでの人工知能による教育システム。教師は $1/1$ スケールの3D映像。教科は繁殖に必要な知識・訓練の他、言語、数学、化学、電子工学、物理などの専門分野、文化や芸術など。

・ブラームス作曲ヴァイオリンソナタ第一番ト長調作品78……ヨハネス・ブラームスが作曲したヴァイオリンとピアノの二重奏。第三楽章のメロディーは歌曲「雨の歌」がもとになっている。

・レンアイ……オメガを健康体に保つメンテナンスのこと。そのための手段をアルファ、オメガは教育ビデオで学ぶ。デート場所である市街地のヴァーチャルは数万種類用意されている。

- ・デート……レンアイを目的とする番の求愛行動のこと。
- ・地震……磁場が乱れる現象であり、原因不明。アラート時はコクーンに退避するように、と教育ビデオで教えられる。事実は船体の故障や事故であり、修理できる人間はもういない。
- ・パンドラの箱……オリジナルの界塚伊奈帆が装着していたアナリティカルエンジンのことを、 α ・IK・6はこう呼んだ。
- ・番……ノアで移送されている一二〇組のアルファとオメガのペアのこと。オメガは二〇歳、アルファは三〇〜四〇歳で回収、加工、支給のサイクルを繰り返す。クロン体の再生は一度に一体であり、それは居住区と食料に限りがあるためである。アルファ、オメガは満四歳までエッグルーム（保育室）で保育され、それ以降はケージに移り、パートナーである番が生育をサポートする。アルファ・オメガ双方が生殖可能年齢の場合、ヒートの処理やネスティングの演習を行う。アルファのケージには専用の設備がある。機能不全がある場合は、メンテナンスルームで調整する。
- ・アルファ（ α ）……アルファ男性の性器には、根元に精液を溜める亀頭球（ノット）がある。受精の確率を上げるため、性交中にオメガの体内で拳大に腫れあがり、射精

が終わるまで抜くことは出来ない。

・オメガ(Ω)……オメガ男性は直腸の奥に子宮と同じ機能を持つ生殖器があるため、性交し妊娠することが可能である。アルファの精子が受精した場合、巣作りに成功した個体の胎児はα性である確率が高い。

・ヒート……三か月に一度の周期でオメガに訪れる発情期のこと。ヒート時のオメガは性欲が増進し、食欲と睡眠欲が著しく減退する。発情と繁殖のみに特化する。アルファとの番が成立することで誘引フェロモンを放出しなくなる。個体によっては、ヒートの症状が治まる場合もある。

・ネステイング……オメガによる巣作りの習性のこと。オメガはヒート期間、特定のアルファの私物を収集し、寝床とする。巣作りに成功した個体は、アルファのフェロモンが作用しヒート時の急激な性欲増進、食欲・睡眠欲減退が抑えられる。

・ボンドバイト……アルファがオメガのうなじを噛むこと。オメガのうなじにはフェロモン分泌腺があり、うなじを噛まれたオメガは遺伝子情報に変質し、体質が作り替わる。オメガは、生涯にただ一度だけ番となる。ノアの番は、全てボンドバイトを終えた個体同士である。クローン体は変質したオリジナルの情報を継承する。プロテクショ

ンカラーは、ボンドバイトを重ねることで生ずる遺伝子異常のリスクから製品を守り、品質を同一に保つため装着する。ノアの船外へ出ると探査モードが起動し、エデン（地球型惑星）が繁殖の条件をクリアしている場合は自動的に外れる。

・ Ω ・ST・18……雨の惑星に降り立った人類。ノア脱出時17歳。 α ・IK・6の告げた真実にアイデンティティの崩壊を起こすが、 α ・IK・7によつて自分を取り戻す。性格は穏やかだが二面性があり、行動は苛烈。ノアでは、暇なときは音楽や映画（力技で忍び込む）で余暇を過ごしていた。好きな映画はハリーポッターシリーズ（二人がデートで鑑賞していたのは「二〇〇一年宇宙の旅」）。新天地では船体から必要物資の引き揚げ作業をしているうちに泳ぎが上達。気晴らしにもなるのでよく潜る。ピアノが燃えずに逆さ向いて沈んでいたのも、いつか引き上げたいと思っている。

・ α ・IK・7……雨の惑星に降り立った人類。ノア脱出時16歳。数字マニアで何でもすぐに数えたがる（無意識）。晴れた夜に星を数えようとしたが、五〇〇〇を超えたあたりで雨が降って中断した。いつかりベンジしたいと思っている。理屈屋だが精神面は素直で健全。新天地でのサバイバルでDIYと料理に目覚める。火おこしと、魚を三枚に下ろすのが得意。

・ Ω ・ST・17……ノア脱出失敗時13歳。口が悪くかつとなりやすい。 α ・IK・6と過ごした二年間は、二人でボードゲームやスポーツに興じることが多かった。怒らせるととても怖い。

・ α ・IK・6…… Ω ・ST・18と α ・IK・7が見た記録映像の少年。映像では8歳。頭脳明晰なIKシリーズの中でも、ずば抜けて知能が高い。イタズラ好きでよく Ω ・ST・17に怒られていた。楽器はあまり好きではなく、絵が得意。キャンバスが数メートルのダイナミックな絵を描く。それも今はもうない。

・ Ω ・ST・0……スレイン・トロイヤード。ノア脱出失敗時20歳（「00」では19歳）。アルドノアドライブTの再起動を担う起動因子保持者のため、乗船させる必要があった。捕獲後、一度も目覚めることなくプラントに回収された。摘出されたクレイドルは受胎しており、胎児は船内で誕生する。

・ α ・IK・0……界塚伊奈帆。ノア脱出失敗時19歳（「00」では18歳）。アルドノアドライブDの再起動を担う起動因子保持者のため、乗船させる必要があった。「00」後スレインの脱獄を幫助、二人で逃亡するも、五ヶ月後ノアズ・クロウの追手によりノアへ連行。出航後再び逃亡を図る。抵抗するも捕らえられ、意識を取り戻した時に

スレインはもういなかった。箱庭のアルファとしてではなく、マトリクスの管理者として乗船することを求める。ノアの心臓部に位置するプラントとマトリクスのロックを改造した。ノアで誕生した実子を養育する。その子とは「君」「お前」と呼び合い、最期まで名前を付けることは無かった。病死。

・（ノーネーム）……ノアで生まれた、地球人類最後の β 。界塚伊奈帆を看取り、形見のアナリティカルエンジンとペンダントをIKシリーズに託す。マトリクスの管理者として一世代で生涯を終える。茶色の髪に碧の瞳。女性。

あとがき

この本を手を取っていただきありがとうございます。

アルドノア・ゼロオンラインイベント「ZEROの方舟」復活ということ、全身全霊をもって書き上げました。佳境に入ると作品世界に没頭し、ずぶずぶ沈んで現実とフィクションが地続きになっていく感じがたまりません。現象としてはふらふらしてあちこちに体をぶつける（特に足の指）、せっかく作った食事を書いていううちに冷め切っている（一息入れようと思ったコーヒーも冷えてどろどろ）、書いていううちにテンション上がって実況を始める（スケベシーンに顕著）など正気を疑うものばかりですが、正気を失ってからがスタートラインな気がします。学園ラブコメオメガバース伊奈スレーディストピア仕立てをSFというどんぶりに盛りつけるの、最高に楽しかったです。でもSF考えるの、それはもうとんでもなくはやめちゃに大変だったので、しばらくは込み入った用語集や宇宙船の設定画など必要のない、本編軸の暗い伊奈スレを書きたい気分です。

内容については、やりたいことを全部できて満足なので特に書くこともないのですが、 Ω ・ST・17の発言だけ補足しておきます。彼は例のペンダントを、 α ・IK・5が Ω ・ST・16から譲り受けたと勘違いしていましたが、実際のところはアナリティカルエンジンとセットで、伊奈帆シリ-

ズが継承していたものです。 $\alpha \cdot IK \cdot 5$ は $\Omega \cdot ST \cdot 16$ がいなくなる直前にそれを左眼に移植し、二人で逃亡を図ろうとしましたが、できませんでした。脱出用ポッドが一機しかなく、一人用だったからです。ちなみにこの二人の年齢はスレインが年上の三歳差で、お互いに初めての番同志でした。番は基本的にパートナーを教育し合える年齢差を保って再生されますが、その前の番に色々あって（具体的には寿命まで数年を残して死亡）年齢操作に不具合がありいろいろこじれていきました。 $\alpha \cdot IK \cdot 5$ と $\Omega \cdot ST \cdot 17$ の二人の過去話も構想ではあったのですが、入れるとストーリー進行がどうやってもうまくいかず、今回はこの人たちは主役じゃないし、しゃーないかあ、と思いついてばっさりカットしました。用語集で書ける設定でもなかったもので、こんなところで暴露しています（子育てパートになる予定でした）。ちなみに、新天地に降り立った伊奈スレはその後子宝に恵まれ、第五子が深海に文明を築く人型先住民と出会い人類繁栄の礎となります。

今回のイメージソングは、三人の伊奈帆それぞれの心象をこちからいただきました。特に[Alexandros]さんの「空と青」は、優しくて前向きな感じが伊奈帆の強さに重なるようで、エンディングテーマにこの曲を流せるような話になればいいなと思って原稿中に聞いていました。

お付き合いました、ありがとうございます。またお会いできますように。

奥付

楽園の暇-Eden's Cage-

発行 Scramble/鳴海

発行日 2023.11.12/ZERO の方舟 15

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

X (Twitter) @narumiblue

PixivID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。

無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。